

凡 4
3657
巻 4

善光寺道名所圖會卷之四

目錄

○戸隠山三谷

兒櫻

二王門

経供養塔

三本杉

鐘樓

宝物

○寶光院權現

○奥の院道條

制札

さくらさ川

○奥の院

岩窟三十三

寺中十二院

投の杵

十三佛

○鬼無里

○中院權現

十五堂

秋葉の社

本坊

弁才天祠

百幅名号

○本社

瑪瑙山

山の神祠

朱の鳥居

下馬石

○本社

○御裏山

礼盤石

飯繩の宮

○浦見の山

熊の塔

一の牛玉橋

諏訪社

朱の鳥居

本社

神輿庫

神樂殿

神輿庫

女人堂

長明火定所

二王門

観音堂

○高妻山

神輿庫

浄手洗の儀

○二季の祭

御手洗川

日の御子の社

神樂殿

経藏

浄供所

手水鉢

荒神の社

鐘樓

尾の塔

ツツノ山

法華堂

○乙妻山

九頭竜權現宮

浄供所

○紅葉狩

是より善光寺へ飯繩本街道登りて記し

昭和廿四年
一月十三日
購示

- 明助山觀音寺
- 木留明神
- 熊谷山蓮生寺
- 夜留番所
- 大燈籠
- 千代霍玉霍塚
- 犀川渡口
- 丹波鷺
- 三疋山寂明寺
- 今井無平塚
- 茶白山
- 北原
- 篠井追分
- 川中嶋
- 八幡原
- 信玄謙信對陣
- 同車掛り
- 武田典厩塚
- 諸角豐後塚
- 山本道鬼古墳
- 氷鉦斗賣神社
- 横田川原
- 千曲川
- 西条山
- 松代
- 祝神社
- 蓮乘寺
- 山本勘八碑
- 高坂彈正塚
- 矢代宿
- 菽蒔
- 雨比宮
- 一重山
- 鼻取地藏
- 村上山滿泉寺
- 下戸倉
- 坂木宿
- 燒飯山
- 神神社
- 村上義清塚
- 葛尾古城
- 同持城
- 中の条
- 鼠宿
- 會地早雄神社
- 耕雲寺
- 水品山
- 岩鼻
- 半過
- 和合古城
- 三郡の境

善光寺道名所圖會卷之四

飯繩與岳より根笹原の免徑を一里をり下ると戸隠此中院小到る

○戸隠山中院權現思兼命本地 兼命 兼命 寶光院權現表春命本地 將軍地蔵

○與院手力雄命本地 正觀世音 別當天台勸修院兩界山顯光寺三谷一山坊舎九

三十六院東鑑頭光寺天台末云云拾芥抄曰戸隠山 影光寺古仏遊行所云影宜作頭 九頭龍の窟々地主神九頭龍權

現每夜米三升炊之並以梨子為神供云

戸隠明神 在戸隠在善光寺之 北西五里 社領千石別當天台三年苦行 勤之又歷三年交代

祭神 手力雄神命之子 天思兼 伊勢内宮相殿左亦祭之常陸國志津社 亦同一射

押開天盤戸抛之其盤戸落于此云云 九頭龍權現 傳曰神形九頭而在岩窟内以梨為神供每夜丑

刻未春米三升備之疑此當山地主神乎為神秘

昔當山有妖賊隱棲惑人平惟茂殺之 平惟茂兼忠子也

伯父前將軍平貞盛為養子字曰餘五世稱餘五將軍是也

武名赫著于東州一旦替身池水避急遽之難得殺其寇與

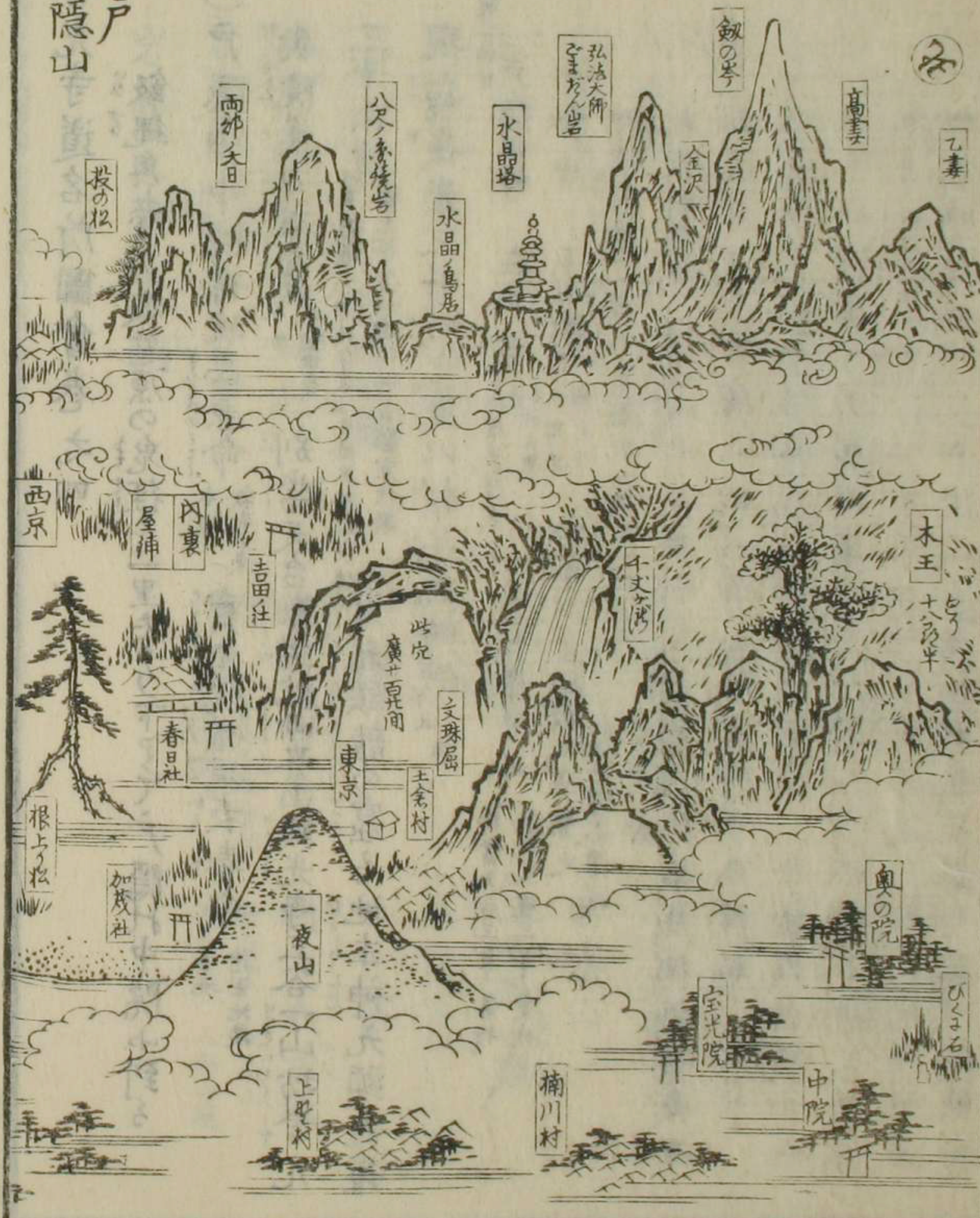
州澤勝諸任又入戸隠山手及妖賊其勇銳之氣可以觀焉

紅葉狩
名所之
圖

此處
其乃
傳
人之
縮寫
爰小
出



戸
隱山



日本書紀

戸隠山ハ巉然屹立として東に秀川越中列岳西小争ひ聳へ北は
 妙高山あり中に安曇郡と帯て遠く眺むべ山を布く其磐石乃おと
 けき山深くして人跡稀ふゆへ人妖賊捕らりて民の害をなすこと
 知るまじかり世ふつ源満仲戸隠山の鬼神を平ぎ美濃國中川の
 山賊を討つ源満仲為信濃中平代可退考村上中川按に神名式惠奈郡中川神社其地
 田融花山三代奉仕轉任八国云云 平かり或は今の中津川なりといへり
 又云平惟茂戸隠山に鬼と斬や又曰源頼義戸隠山に鬼を斬と大平記小
 見くより或曰田村丸鬼神退治と云以上心説未詳

持統天皇五年八月遣使者祭信濃國須波水内等神云云按小水内
 等神と即戸隠神社なるへ天平年中神帳を勘造とあるはるり
 夫木 信濃路や風乃たより子をせよとてつたの白く神垣 家長朝臣
 荒安村より直ふ戸隠乃中院へ行くらば荒安より一里登り入坂と越え
 又一里餘飯繩原所飯繩本庄
 のりりりりりとゆきば戸隠一の鳥居あり石の大鳥居なり
 此邊より戸隠領ゆく守護不入の地なりけき居より中院権現まじ

五十三丁あり一丁毎に石標あり○熊の塔熊の天
 とする○一の牛王橋○街手洗
 川○日れ清子の社○児桜みゆり桜ともいふ日の清子れ
 社に在るは極度の全務○二王門外に宿屋あり
 内に坊舎あり○十王
 堂○秋葉社○諏訪社○朱の鳥居○神樂殿○經藏○經供養塔
 ○三本杉○一山三谷の本坊兩界山勸修院顯光寺天台宗あり
 敷山より入院門前小立石あり
 守護不入別當社職勸修院と刻む○辨財天祠本坊の南に他中あり
 宝光院の近きなり○手水鉢本社の
 東に在
秋葉社已下是近き
 石垣の下にあり石階を登りて○中院権現本社祭神思兼命○神輿庫本社の
 東に在
 ○街供所日西に
 あり○鐘樓日西に
 あり
 戸隠領千石内二百石神主栗田氏
 配當栗田上野村小住外小造管料三百石街供米料八十三石あり
 中院坊舎十二院宝藏院 正智院 壽教院 行勝院 攝善院 實道院
 十輪院 德善院 覺照院 智泉院 奈樹院 實泉院以上
 行勝院小百幅の名号と藏む縁起に人皇八十三代土内門院の街守兼
 元丁卯年親寧聖人勅勘と叙り越後配流光陰五年と経て建
 曆辛未子月中旬七日岡崎中納言範光卿と以て勅免ありて志
 くれとも程支彼地に化を施さん為小因二年の春あまび冥赤と
 ちろろごひ信濃路よりて飯繩山の麓ゆく清芽子に作るは西小



戸隠山一鳥居
中院権現
宝光院権現

飯縄原

戸隠

又中ら戸隠山より迦葉仏説法の峯殊小垂跡の毛力雄命鎮守國
家此霊場にて王法仏法令と誓小弘するを偏に神の道徳を
いそぐに猶んとく道を行き登りて其むく我比叡山無動寺
在一時戸隠の行勝院の幼稚の學友なるがゆりて存命すれんと尋ひ
給ふに行勝院出逢へ其候自坊小精ト入と去一昔の地縁をれより
街宮へ糸籠ま〜既小奥の院より兩界山まで七里れ及嶮〜岳
山うれば石も習つぬ法草鞋小竹の杖と力〜投の杵をほ〜いつ
礼盤石小至り給ひ街経後誦〜給ふを一日乃向方り通ひるよ
日毎に名号とかきたるひ百幅成靴ありて未せ此衆生淨土往生證
據の爲ゆ〜て行勝院へ授與〜給ふ 下畧

中院寶物。笛二管。手力雄命け面。同御笏。猿田彦の面
。龍の面。伊弉諾尊の面。法華經一部 武藏坊弁慶筆
。惟茂將軍け太刀。弘法大師の唐鈴金。神祖御乘鞍一口
△時と打事午と酉に鐘其外に太鼓あり 宝光院 奥の院に太鼓
と鐘ゆ〜時を打り中院小准と



○宝光院権現一の鳥居より廿八丁目大之保村乃分岐口に傍示の石標をたぐ
入り男鹿沢に橋をわたり又分岐道あり右を控尻道左を鬼ヶ里道あり
橋乃側左に前原地藏堂同く神明宮あり二王門を入る左を
坊舎十二院あり 普賢院 善法院 偏照院 延命院 教叙院 玉泉院
安樂院 廣善院 智照院 福壽院 法教院 淨智院
附言遠州秋葉三尺坊を教叙院の住侶せりあり一ヶ後小天狗
道に入ると云

塩尻 秋葉山の観音の行基大士の作にして古に靈場なり三尺坊を
三百年以来山ふ奈る信州戸隠の飯繩を勸請と云ふは古縁
起等此心してのやと彼山の修験者より 乙未五月八日
快然院談

石階を登りて朱れ鳥居 左右に垂格
の古樹あり ○神樂殿 ○荒神の祠 東西小
お附と 又石
階との有り橋あり又石階を登りて本社より祭神表春命

○神輿庫 本社
車に在 ○鐘樓 戸
小在 此所より中院十二丁の捷徑あり
宝光院権現の寶物。牛玉れ玉 東海より
よる不らん。惟茂將軍の太刀 荒鞍山紅葉狩
鬼神退治の太刀

○俱利伽羅の太刀 日將軍
奉納 ○羅漢掛物 北殿司
華 ○雲坐阿弥陀 親鸞馬聖
人華

已上 是より中院へ歸りて奥の院道裏山道を去る

奥の院道 中院本社の右へ付く
登るより奥の院 ○山の神社 右の山手
小あり ○女人堂 是より内女人結界といふ
立石あり堂の内には丘尼

の石と成る 八丁目小右へ越後の分岐道小石標あり 右越後
左奥院 越後の方へ二里半入
りて裏山道 戸隠れう山
とよなり ○釋長明火定所 右八丁目立石
の傍小あり 九三十

歩りての中央小五輪の石塔 右の方に康保三丙子
記せりは外文字なり
元亨教書 叙長明居信州戸隠年二十五絶言語誦法華亦三

歲不偃臥一日語人曰我是一切衆生喜見菩薩也
来此所燒身已三回今命盡上兜率便積薪入内自
焚 康保年中也

五輪高四尺余屋根石三尺四方をうり臺石高サ三尺斗上に柵の本一株有
○児の塔 右
むらう 色を以て養ひ子ひりりりは夫婦ありすけふせん
とて此山のむらうむらう或時女れり外よりあを越しりけりも婦ら
有り合せは男ありかりて文字ありさうらねえふゆきも婦ら
いづうまのまうら目いづりけきは山の児れりありていづく

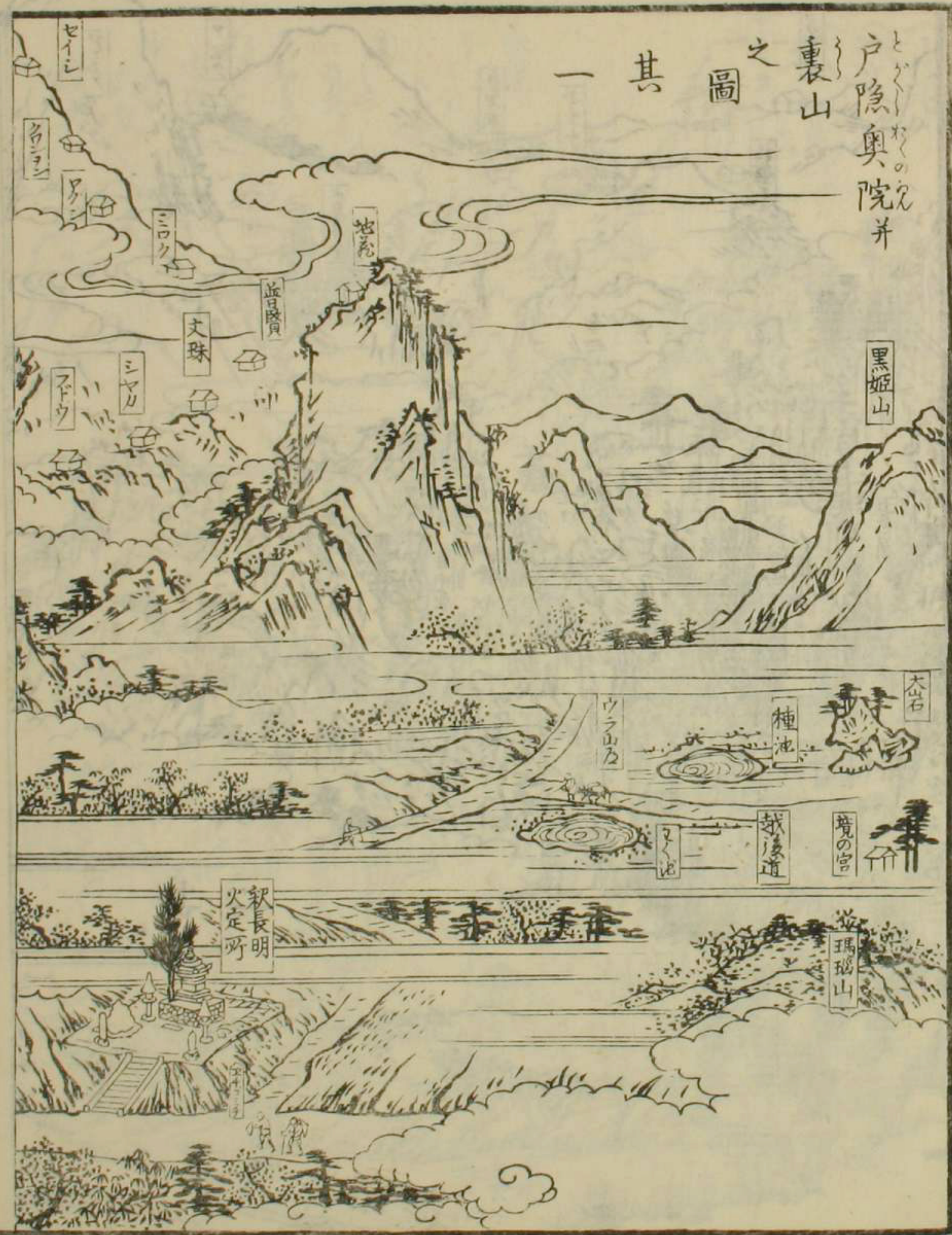


或曰濡るを棄てて
 袴徑も又は侍れまゝ母を
 ぬ通も此見かゝて実を
 告て父ははろりりめ
 さるや曰く父を侍
 愛もろ人の必ほ
 の母も厚く罪
 らしむも頭をさ
 父の心を安んず
 りんが為かり音
 晋乃太子養
 母瀧姫がまよ
 身危一人の如
 瀧姫が罪を
 らへしつゝ君子のらく
 つか父老給ひて瀧姫
 なられを安んずるは彼が

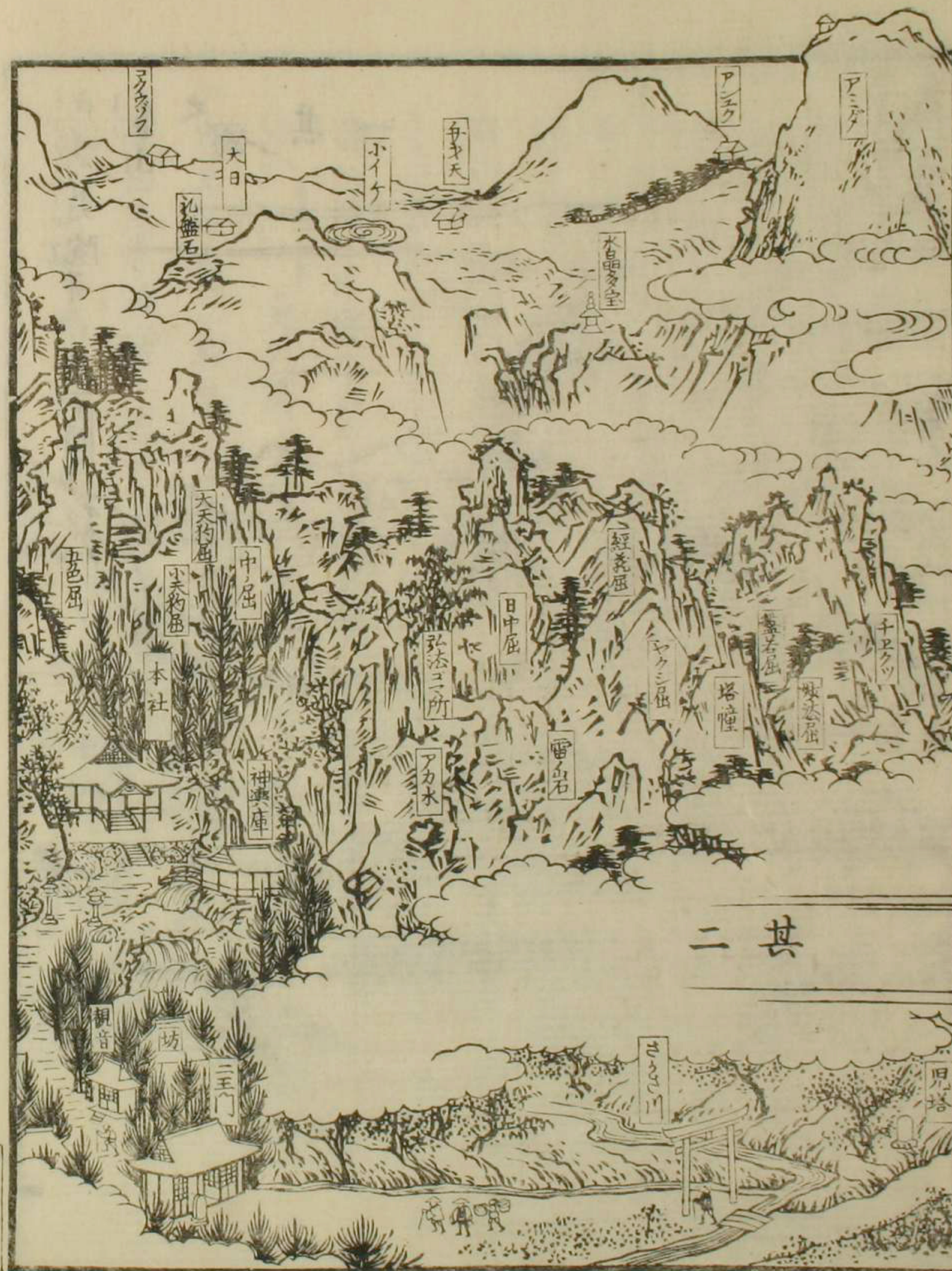
罪とありはこは父
 怒つて彼を侍れ我
 見ふ志のいどと人
 のしてたのを教こ
 きのひぬ其ま子
 と交わりつれども
 父の心を安んず
 りんが為かり音
 晋乃太子養
 母瀧姫がまよ
 身危一人の如
 瀧姫が罪を
 らへしつゝ君子のらく
 つか父老給ひて瀧姫
 なられを安んずるは彼が

此多よみきるせしと取つてきれば披きんく思ふやうさる者の
 師のよきまば養母も追打つて父もなやみあまのをさるゝ外
 此事にんや一讀多ま本より父も一も是を侍りて何気
 らくさつてけるその情を感してくくるむ
 位徳なる本居落ふか九本橋ふみろ時をりやうりーに
 子返
 志なるならぬのさるゝやもやもさるゝも本とさるゝさるゝ
 寔に父のさるゝふれぬをよみ久く其難を救ひ心をんや
 一の丁せけ鬼の塔なりとそ本朝孝子傳小見之きり

○一ツ橋 小川にて
 ○制札 ちまよ
 ○ちくさ川 橋あり
 ○朱の鳥居 十五丁目
 側は
 ○下馬石 二王門の外
 ○二王門 二十丁
 是より内大杉の並本両側小茂て
 其根麻を乱ま如く洗つて出
 此道本ら侍り侍れ道に片枝の杉とて
 列樹ありその如く片枝をて整えり
 此根
 をはらひ行小大岩小岩路傍小轉び出苔むゝる間を攀のぼる
 さや十丁やうりいなん街三洗の末滝津流なてを耳を澄せり○觀
 音堂 二十六丁目
 右手にあり
 ○法華塔 二十七丁目
 左手にあり
 ○奥の院 十二坊
 左手にあり
 勸法院
 常樂院



成就院 佛性院 妙行院 常泉院 安壽院 此十二院の社領の内十
 妙觀院 金輪院 東泉院 真兼院 妙智院
 石廿石三十石づつ配當あり又釋長明の妙行院に在住せり康保三
 火定小入 ○奥の院權現本社祭神手力雄命 ○神輿庫 本社
榜の向 ○御手洗滝 本社左のわたり ○九頭龍權現 本社右のふもと ○御供所
ふわり 不動の像を 同く前の下にあり八月十七日交代翌々年八月迄 但し奥の院の寒氣甚く雪やう
 出入三年勤仕より是は三谷三十六坊の内を順表す 汝く定位成がく十二坊のみぬ里の別荘に在りて空院之唯淨供
 所の詰番一人に侍者一人僕一人の定住あり毎朝米三升炊之神供
 とけ并に梨子と供ふと毎年正月元日に別當顯光寺奥の院へ參
 詣の節手懸をあらはにのそ雪の上と人夫あつ引小鳥居の上をゆく
 雪の深きる知る一折奥乃院嶽小二十三の巖窟あり
 各其号圖小顯然と東に黒姫山をて山脉續と西の方の百丈
 滝西光寺跡僧ヶ岩をて皆西南小あり一夜山新倉山 紅葉鬼神の
 是より鬼無里村小出 鬼無里村の馬の鬼神退治の後今より鬼無里といふまの



二其

○戸隠御裏山中院より七里 乙妻山高妻山尾を劔の岑とつゝ又西界山
 とし福と金胎西部の曼陀羅と地小妻なるを以て名を以て故小妻
 猪の輩此登口にて草鞋を替りつゝの道通に十二仏を置
 る順路を二所各青銅佛あり不動尊は石像なり例年六
 月朔日より七月晦日までを清山明とて登山をゆるぐ
 中院より八丁目小右越後の分道より又大く

古裏山之分道ぬき登山越後道を直にゆけば大池二つを右と
 涌池左を種が池と云大岩境の宮あり
いさへ瀬を外まはせを越後より運送するなり

○投の杵五系短 地藏の邊より始りて奥之續き七谷小延よりて磐
 峯一草れ如く其本を切るなり登山の輩は此草を採り帰る難
 産并歯の痛等の功効著しと云○古池九勢至の先あり 登山の者多く中院
 ままで日帰ふもろり嶺小通夜の輩は礼盤石より小池の弁天とゆい
 池水より粥を焚く草小の投の杵と手折る用中云昔はけ所小

籠屋のりり雪に漬きて今いほ○禮磐石大日の例あり 虚空藏すてい

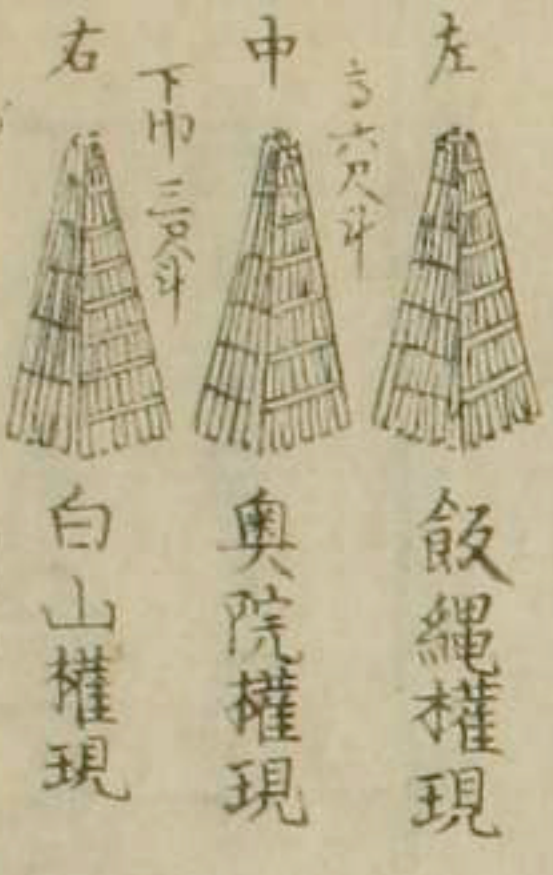
行雅一此所あて谷を隔て八尺の圓鏡曼陀羅石を拜む礼盤石なり

○二季れ祭礼の四月七月と四月十五日奥の院十六日宝光院十八日中院と

三谷の坊中系集して誦經神主栗田氏多勤又戸隠派の修験して
 三十余人あり信越兩國の間三四十里四方に散在せり此輩四月十七日

小登山して十八日中院の祭の相結祭終る本坊へ参詣す山伏の内り

火祭三谷の坊中系集誦經神主系勤あり扱火祭の次第も



圖の如く片方小足當と着く三本立を是を柱杵といふ三谷の
 坊中めく一人づ當番と定む是を先達と云扱先達れ院あり

三谷も廣前小如此順小なる但飯繩白山隔年に左右よりなり
 中院三本とも竹あり推る 宝光院三本とも木あり推るは右は宝光院
 門前七十軒の者年申末を伐出せ伐後まは中院門前八十軒
 斗の者竹を伐出せを伐せしむのこく 官家より竹免札
 あり奥の院柱杵の門前よりなる右一本半竹一本半一本
 三本の柱杵に神名を号するなり右竹あり其の地を

幣此幣は製二本と紙一帖を伴ふ 三本を一手に持て三人へ一夜小湯を受取
 と等しく神前へ走る是れは走 神前へ立並べ先達の唱辞を
 て又以前の三人へ渡り直に柱を投上るをよめて又取柱
 松小まきく火を燵く焼く其焼方に勝負をく年乃豊凶を定
 む此火祭の己前に長刀れ試闘あり惟茂將軍鬼神退治の古例なり
 とつ坊中弟子乃中しく夜小玉纏を掛く戦なり八日ふら中院より
 長刀二振寶光院より一振十日より宝光院より二振中院より一
 振出る但し長刀一振は
法降二人つづ 十五日に奥の院へ長刀の更になく火祭のとり
 同月三谷に太く神樂あり定日十八日なり一年に宝光院一年に中
 院一年に奥の院と順番に神前あり執行あり又八月五日に中院より
 又て執行神主栗田帶刀回職十人程少く執行あり
 ○飯繩の里宮田の庄子に
本申に在 是れ三谷より一人つづ二年づ年番ゆく持たり
 △古裏のふれ草草多く茶本白木
黄連其外 夏秋の草草と揉人多く又桂の本斗の一谷

五善光寺堂普請等にい買取ふる難所を出入り嶮岨なりといふ

戸隠詣

善光寺別當権僧正孝寛

上畧

はつ月以より雨降るがゆふに十餘日あり是れ去かたに孝本にほく
 人民れおれいあつるさぬらんを一里にあり居て四方に里くを
 おろく夕立なをて洞ひに善光寺に境を限るる半のさうとを
 いらぬ人夜ふ九頭持現を籠まにまはせぬ雲をわく一はを
 くらく中つり神カ自在なりましく慈悲をりくちくわんは
 みつりくしをてあらんやいうは新をとりふうまひをめん
 本のみらうひをもちけしつりあ守

神もききやふよよさるるをれ福うし里ぬらさくうらぬん
 福うよさや十う九つこの月れ新のわいら忠神をういさけ
 と移してて本宮にたかりて奉納のちる後を
 引明し岩戸を神れくわをて日新あうこれ代をちりま
 かして清供所にいける教法法途へいさく素よりれむのひるれ
 何ぞいと神酒をんどのをせめてたさくまのうりま
 名もあつぬ草れおぬり是れはくはせぬやて二めくさくさ

中略

さして申け刻以中流乃本坊に降り居ぬ志つゝ休ふやせに
俄小舟を以墨を染りてゆく車軸を流し居ぬしこい九段新橋
況の感應は雨なりやんく罵りけり中畧廿日とて起出く又此の
雨いさのよ乃さつとやみぬくゆりしは殊雨客襟冷をく猶さら
て居るものめしと歩打らぬ言ふら中流控況乃太く神楽あてあ
るしも出ぬ石は是をさる者と扱はぬまゝあるも年け刻をり
ふたてくゆり也下畧

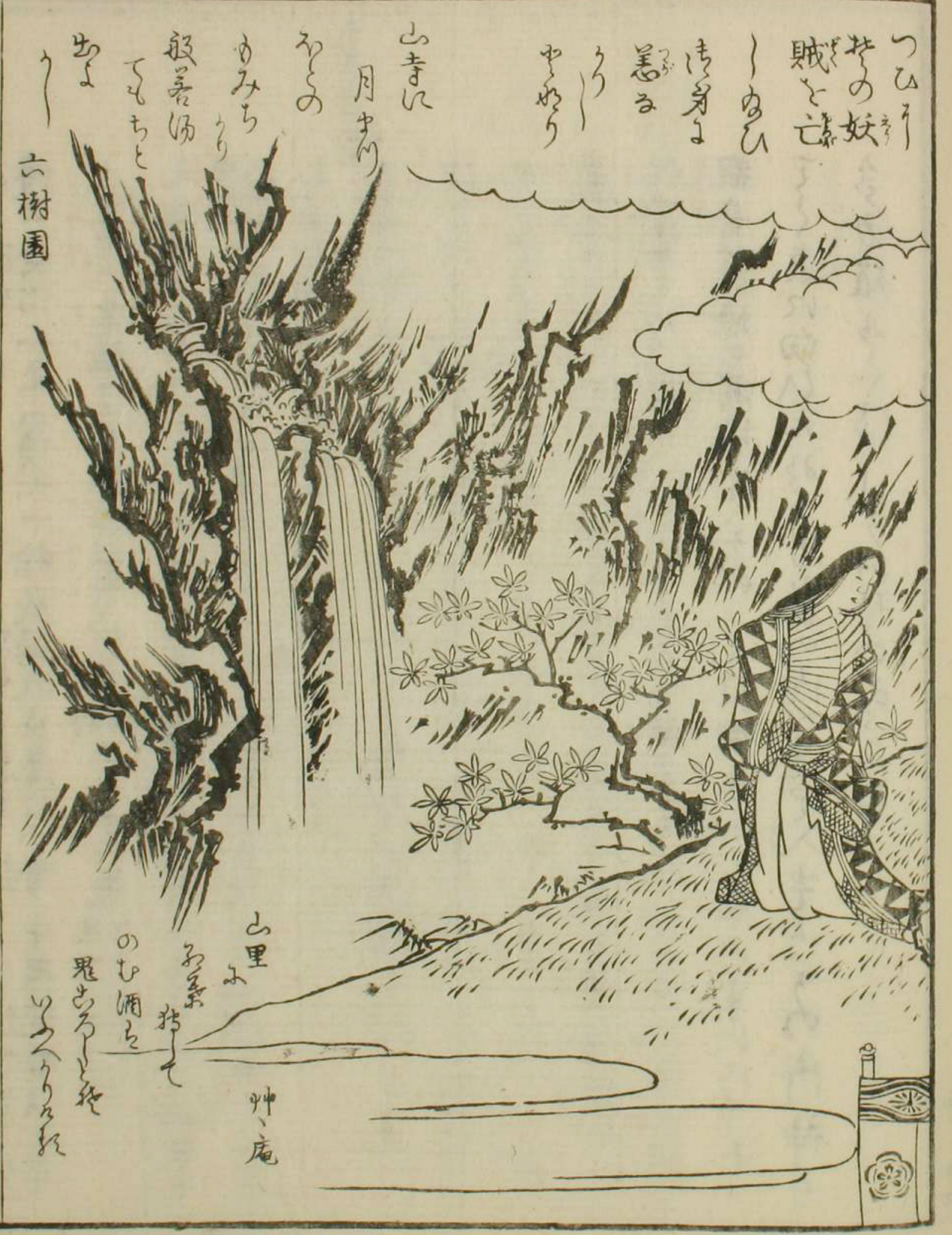
○戸隠山の西南に鬼無里村あり土倉村嶺までいふ所と越く戸隠山と右
小見く黒姫山小出越後わける間道あり永禄年中牧の駕の城小武田
より馬場美濃守を置く越後の押ときほは是が為なり世に戸隠山を
浦見の山といふ此なるり。浦見の山八重山抄に
伝法に
尋りやちられを傳へて去る人も人をもつゝみの山乃通路後三位
為實

○鬼無里は南小大塔といふ所あり今大塔
味は作大塔記小應永七年小笠原長秀
小笠原井川の館政長の孫長基子
世に三義一統の作者といふ
信濃守はく下向の時伊奈郡より佐久郡

にわたり善光寺ふりる時小國人と不快の事出来く同く九月更
科那塩崎の要害に揃菴を合我小地より伊奈一郡味方と
て一日四度我ひし長秀終ふ討負水内郡大塔の古要害に逃入
志るを兵糧乏しくして上下に飢渴廿余日小地より長秀れ手乃勇士
三百余人悉く討死たり此時佐久郡耳取の主大井治部少輔
光矩和議を入り漸く軍散ばりて長秀は舍弟政康を
濃州土岐より呼返りて惣職と讓り上方に退去云又いづく
頼阿信濃の名所とんとて長秀に伴ひ下りし小地ひの外より
事起りて菟城のうらにありて窮院言語小絶より姨捨山の祿
此時にあり也記せり

艸菴集
九月十三夜
姨捨山の祿
按應永中頼阿存生の事
頼阿藤原道長公孫師實公之後俗名貞宗出家
号養尋後号頼阿二階堂下野守光貞子也

平惟茂と負蓋の甥
 あり世人傳吾將軍と
 稱と夷洲ホリ
 時藤原の諸任
 と討ちあはし
 其威名近國に
 及ぶ其のあは
 佐牧戸徳山
 此紅葉と
 遊後
 とあひけらふ
 妖鬼美女と
 變じさう惟茂
 乃命とさうまん
 やつてまゝる所より
 八幡大菩薩の
 才大さふより



つひに
 其の妖
 賊とさ
 しぬい
 清身よ
 善ま
 うり
 やめり
 山寺に
 月の中
 らの
 むみち
 般若ゆ
 てもちと
 ちよ
 六樹園

山里
 のむ酒と
 鬼さるし終
 りてうらたれ
 沖庵

傳云貞治二年の頃七十餘歳攝政良基公小會して愚問賢注と著

一正風の龜鑑その後雙林寺に寂を八十四歳東野州圖書に
忌日三月十一日

又迎場文集と引て仰蔡花院の平生棲息之閑地終身安心之幽莊也

頓阿五 應安五年四月日弟子法印大和尚位少僧都 慈賢 敬白と之

たれば頓阿も應安中遷化疑ひをるべし

土圭の叙するに戸隠山に二重に瑞籬を拜して奥乃

院へのちるに龜をる山のうふもく移く中臺ふ南北ふと川乃嶺

ありおのくまに岩をささりあましく八色をふりて千峯

萬山のうららけうららけ靈木異草うららけ或は佛菩薩の来

化の姿もけり或は天人を庇の妓樂をそのへる所もあり併

觀音薩埵の勝地ありそ傳く社頭を水の嶺乃半にけりあが

てく東に向ひ大なる岩窟の内へ造り入るりその清神と

多力雄あまはまにけりあまを

竟惠法師紀行
上畧

瑞籬やまの川岩本に雲をのれあまも神の力とせむる

吹おろそ岩のあじとほろを移りまきや谷れ戸隠乃山

十六日に又杖蓑乃山室にとありぬ方下畧

○明助山觀音寺 普門院と号に
中の法新村小在 本尊馬頭觀音わく髻觀音と称す頼朝

卿の守佛といふなり 山丈
九か 又正觀音一躰智證大師作あり伽羅佛之 山丈一才
八か

右に二躰安置す

文學上人治承四年七月平家退討の院宣と下し伊豆の北条

蛭ヶ小嶋小赴き頼朝卿に授き義兵を揚給ひ同五年八月

十七日頼朝卿初陣に伊豆の目代和泉判官兼高と討ちあはし

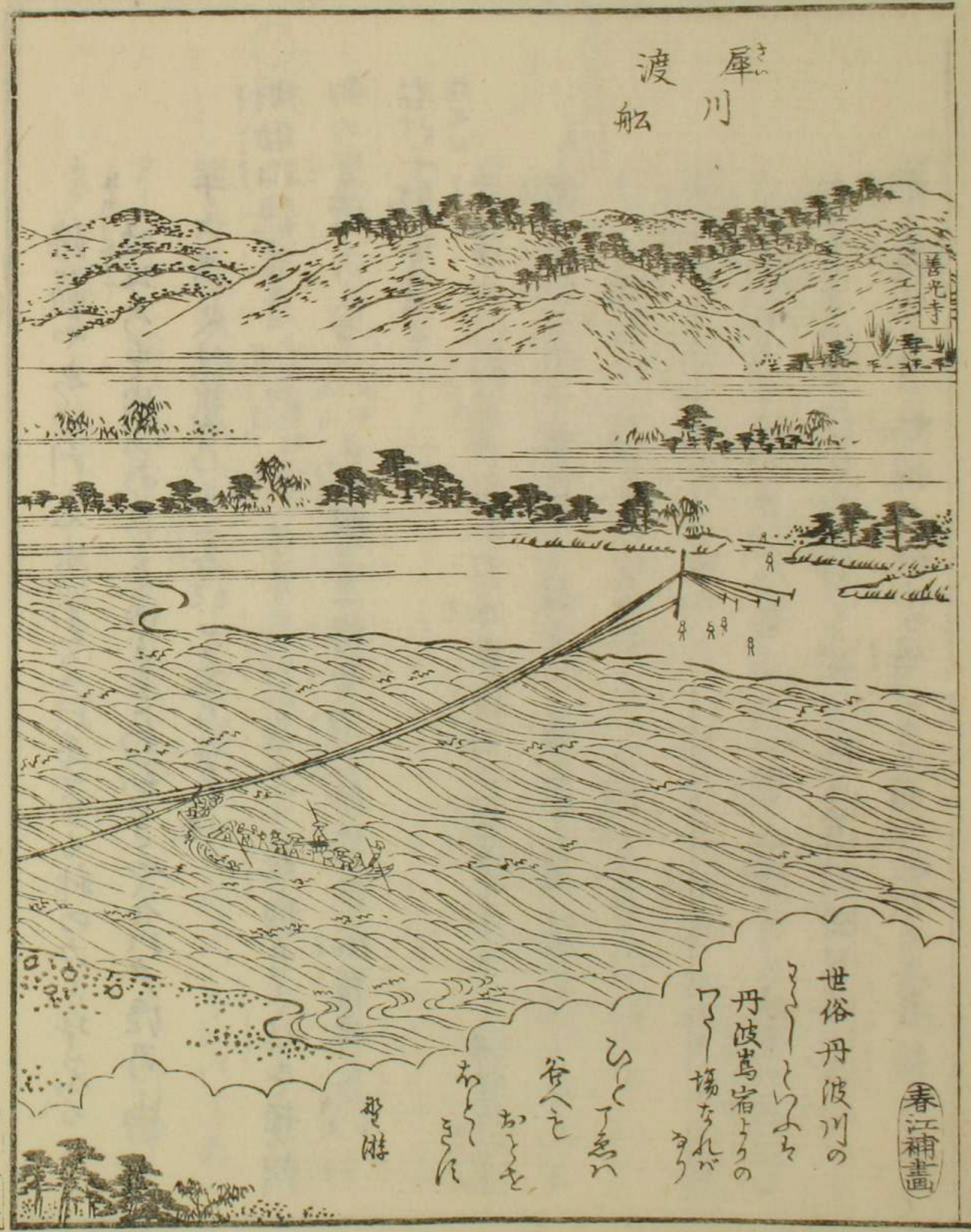
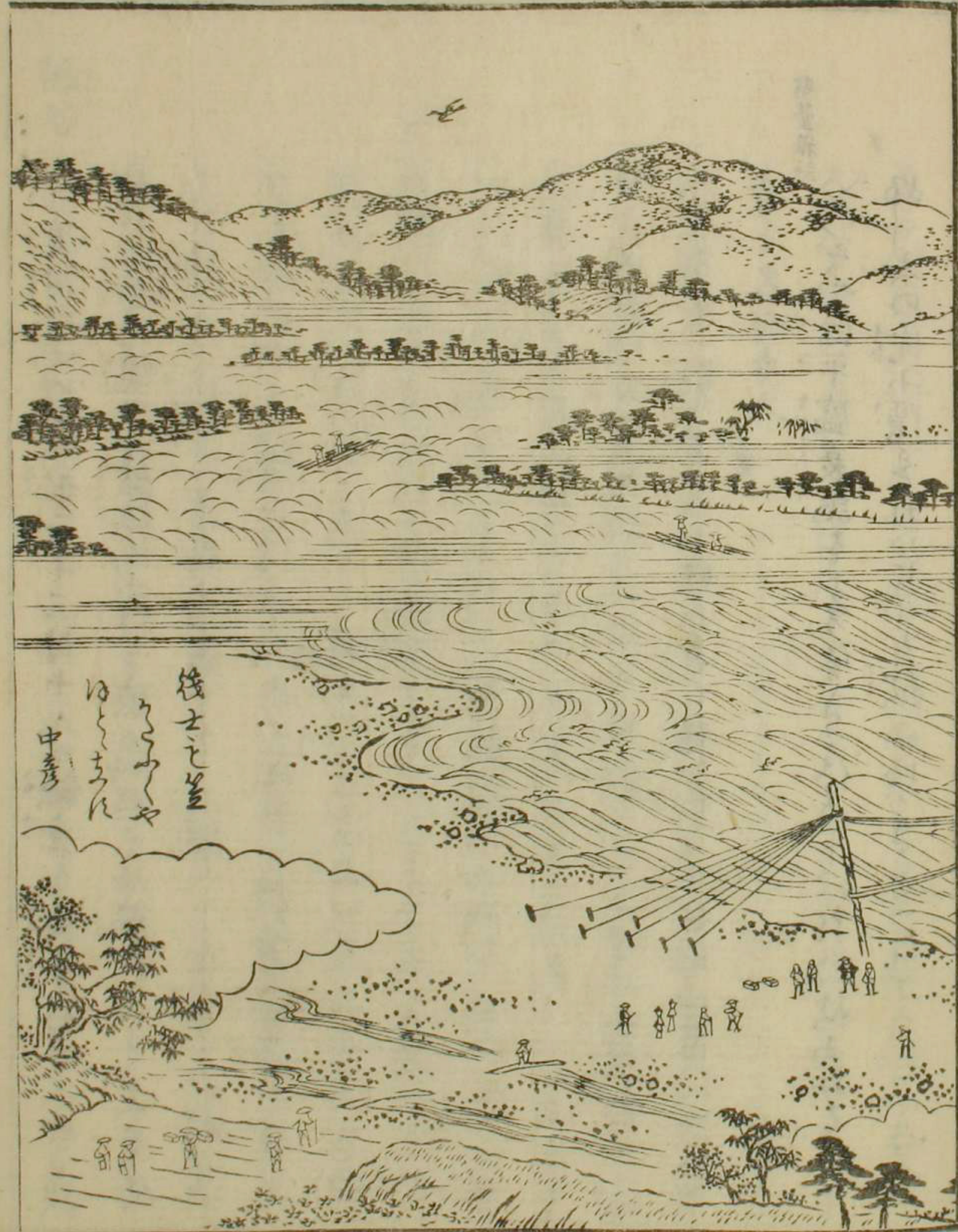
石橋山つて大庭景親股野景久梶原景時等其勢一千余騎

と合戦ありしが敗軍は頼朝卿に纒七騎わく土肥の杉山に

紛て入る古木に空の小舟身を隠し終る其時觀世音の雌雄の白

鳩と現れまじ蜘蛛と化して卿の危難を救ひる其後本尊を

縁起曰



仲追討のころ壽永二年三月十九日鎌倉を發軍あり木曾義
仲の信越乃境する熊坂山小陣を取る此時も勝利あり本号後
より嫡子清水冠者義高十二歳からと人質として幕下に越され
々々頼朝御大小悦び清水冠者を相具一鎌倉に歸陣し終る
其後源氏一統の世と成りて建久八丁巳年再び善光寺へ奉詣
の時も當所漆田村に滞留ありける夫よりして此所を中
此所村と唱へ奉り然るに髻觀音は示現あり此所我有縁
乃勝地なれば爰に留りて永く末世に庇生を渡すべしと告げ
とて頼朝に止まを傳て一字と草創して法守公馬頭觀音及
び正觀音一軀と安置し給ひ自ら額を彫りて明助山普門院觀音
寺と名付ぬ
下畧

駿臺雜記

つらぞや保平盛衰記をよみけきけりしに於て故小抄に
婦一本の穴小隱をぬりせしが故小抄に記して既小自叙小なる

とる耐警れ中に仏の小像とゆひそくを首と敵は渡さん
大將軍は所為にあはれいとせんやそかゝ人のくくれば所ふく
至きしとなりし門の正しくなるまれば恥くききりあるや
仏をねみく後生をたごうんと思ふは丈夫の志りさあらは
恥うと思はるまじきべしはけりもたさしや志らる佛とまじ
まじもいふとば持ぬぬあくるやあまきとめて人々を羞悪乃
あらを固有るしりし事とあり
下畧

○木留明神

荒木村の内 住吉明神を祀る俚老の曰む善光寺伽藍造営乃良

材多く犀川を下き折々洪水して大材むねしく北海小押
出かんと口々と住吉明神忽然や現るる事い不思議の奇瑞
さぬくありて材本まきく々此ありに當り給ひしよよの
は所小祠を建て木留明神と崇奉るる方々

○熊谷山蓮生寺

女上村 寺傳閑淡し此を於朝の古跡多し

○夜苗の番所 はしく 犀川出水のあとに川の瀬もほづろなる故旅人

お留とて松代侯より此番所を建屋を以て旅人を憐れ給ふらん

○大燈籠 石ゆく左右にあり善光寺に燈籠あり

○千代鶴姫 玉鶴姫の塚 市村の伝説あり 此千代鶴玉鶴と熊谷直實の

娘なりといふ説あり如来堂よりいそぎまで十八町といふ

○犀川の渡口 俗に丹波川の渡といふ丹波寄者あり 川中十八丁深山の谷川幾瀬より

なく落合ゆく急流の荒川なり出水の度毎に淵瀬習りて定方

を山川のまじひからへ東海道富士川にまじり急流をれば尋

常れ渡るとい事異なり竿ゆく不叶彼方岸より此方の岸へ大

綱を引るといそれよ小綱を舟を舟人五六人して其綱を繰りてつ

ま此川下に綱切の伝といあり永禄の以上杉謙信戦場と聞き其後

を越し敵の追来らん事代よりて綱を切捨ゆふと好りかゝる急流を

とも代士といふも人易むに畏れをばは運巻水に任せくと思

ひるげたるいつに老よりいやは其後より岩小突あたるものなり
は忽ち碎く北海の水層とあるなり此道小世をわける松山人の左のみ
かゝるとも思ひをやりをんり流年川暗度といふ代頼阿

志ちといふ月日よとほて近年や瀬瀬ともなれ山川乃水

六町程相對して巷と方と其餘町裏に散在す矢代宿へ三里

更 丹波嶋 科

此色川中嶋といふ支と犀川と千隈川との間をまばり是より

上氷鉈村北原南原芝沢市幣川弥勒寺村を徑く篠の井乃道分

いづる右と京伊勢道左とい戸道千隈川を越く矢代宿より是北

陸道へ出る頃路ゆく諸侯も往来ゆふたり又丹波真川支れ節川下

大豆嶋の渡と歩む可い峠かり考歩坂より松代の城下ゆく西

条山の麓を巡り雨の宮より矢代宿へ出る方り川中嶋の天文永禄の

頃甲越の英雄志を闘争あり名高れ古戦場なれば其大旨を拾

録しその古趾を採りて粗きを誌する如左

北原村に大仏の
阿弥陀堂あり
撰待所あり其
向ひ小旅籠茶屋
松屋何某といひ
川中嶋古戦場乃
旧説数年来吟味
して案内云々
即其裏面と
板釘云々
旅人小これと
切云々
又裏小池あり
大行の鯉を
救多終云々
其外は多し
小蜜蜂を
飼ひて蜂の
蜜をとり
家あり
とぞ



甲越之西將帥師
戦于信濃川中嶋
其戦世所知焉
然審知其古戦
場者少矣間友人
松屋主人者審
図川中嶋古戦場
以上梓併小冊子
使人感古云爾
探齋題



大佛
撰待所

○三疋山鎌倉院寂明寺 丹波島より東一里真嶋村 詣りて見る小小院ありて

堂い本尊阿弥陀如来唐銅佛一躰あり仏具の飾りも亦く侍小本札

あり 當山開基鎌倉寂明寺時頼入道 弘長三成年 十二月三日 寺傳聞あり

寺僧を尋らばあやれ位階出會ぬとくくの由を尋らるに詳なきに

只之れ乱世に什物其外紛失して今無禄無檀地と成て大に衰

廢り但あはゆの記録に松代大英寺にありとぞ答へり

○今井四郎兼平の塚 今井村兼平山 功勝寺にあり 兼平此古跡筑摩郡元洗馬ふとあり

く信作の薬師如来の堂今も猿鬻昌なり里老の談ふ兼平が居館

より業師堂まで一里之間泰信の時風雪を凌ぐ為廊下ありしや

るん今に其礎所も小残ありと云其時代の風俗ありと希有此一説

茶臼山 河原の上あり 永禄四年八月上杉謙信出張西条山小本陣を搦

先手の矢代色へ張出へ往来と差塞へ故武田信玄は猿島場通へ

○川中嶋合戦大意 武田信玄四十二歳 上杉謙信三十三歳

永禄四年辛酉八月越後の謙信は上杉殿上州平井へ歸住の儀信州

此通路不自由なるに依り調へて今度と信玄と有無の一戦して

関東此路を開きまんめれをとつよめんと一万三千計の兵を率へて出

るは是迄信玄が後攻ふ左右より妨らきて肝を胆しぬ度海津

より奥へ入る信玄出るは海津と信玄とみね一方に受くおちて

幾久し越後より此後攻押来り善光寺と先陣として犀川と前

小當て入代り戦ひあめん小信玄終に敗北せん信玄是を悟り出張

せどんは西条山小兵を残し半と出して海津を攻むは信玄も

輒るべしとの丸沙汰頻たり其筋の趣は

一軍兵七千五百計は外へ人足也但善光寺迄は道中へ人足

と以荷物送るべし而荷物大略善光寺に残し中へ要

用の物斗持ふと云へ

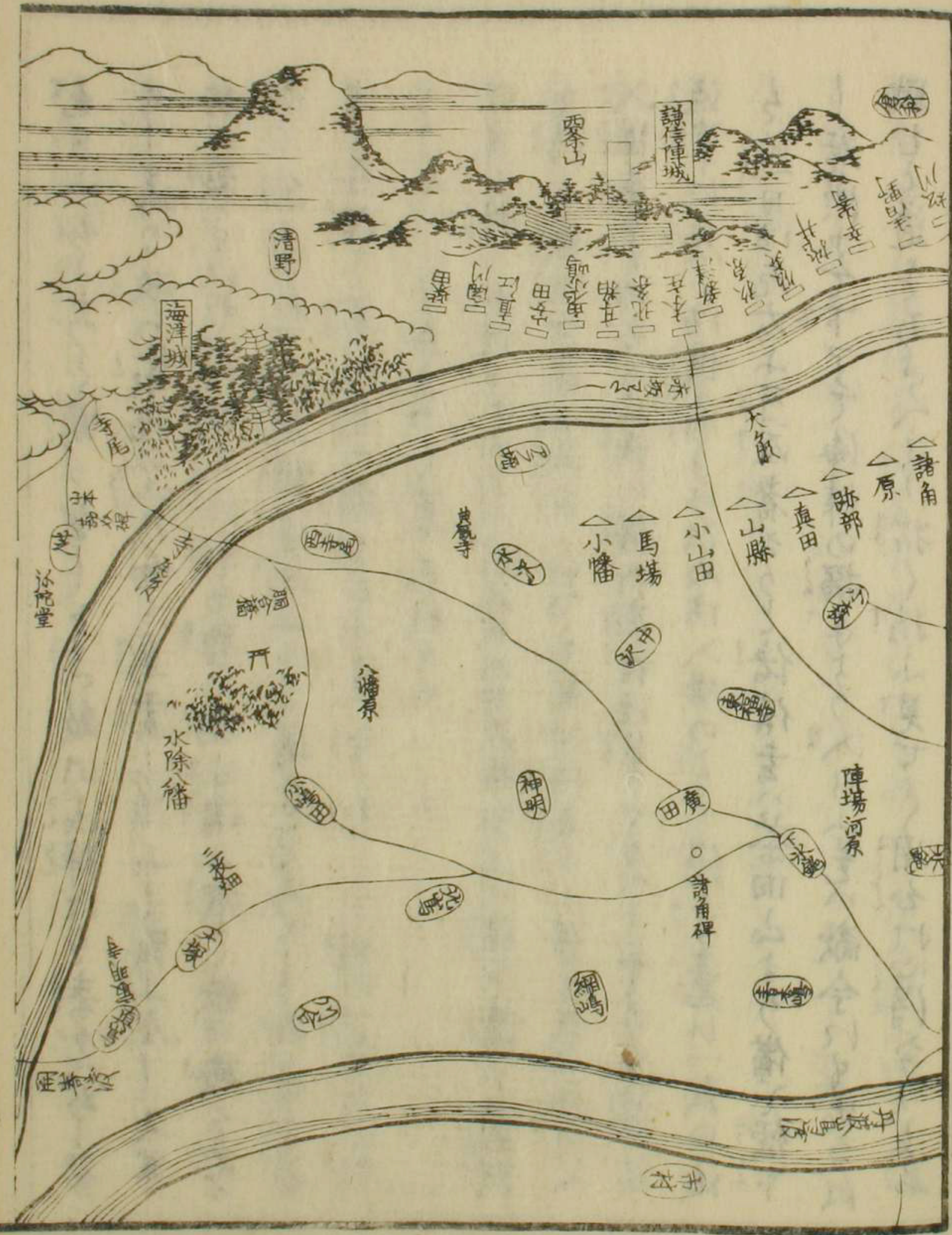
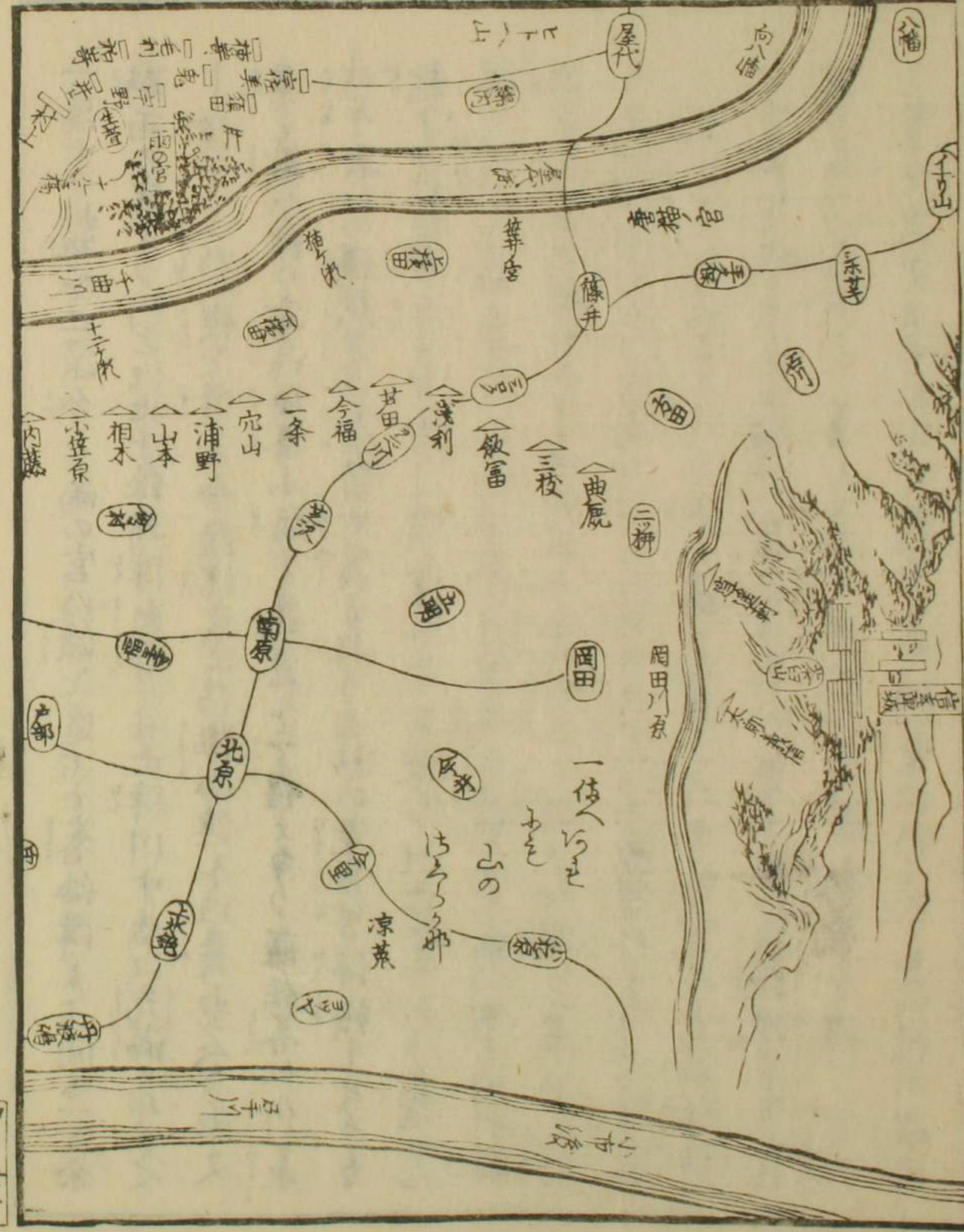
一 若光寺迄去荷也馬少く有之茂方川と渡てい悉出荷とすべ
 一 兵教と幸若光寺集並一丸次弟彼地へ送べ
 一 近圍降系と大名并遠境之諸侍い道く遠近依て是速定と
 々色ハ各手寄以弟未定と彼地後攻と幸ハ一丸次弟如法
 可獲城之付 軍役之諸色御自分の賄を費とくす城代北条
 丹後の相計旨ト付不也

斯く八月十四日春日山と奔軍翌日中寫に着陣雨の宮此涉と越へ海
 津の向へ西条山小陣をす山下れ小家少く放火せし海津城代高坂彈
 正兵を出し町を焼せと恐る色なく下知せしとくは更甲府へ急と告
 別年属なり々色ハ同十八日信玄一万計の兵を率し甲府を渡立兼
 と此法の如く道とく軍勢相加り信州先方虎七千余騎猿ヶ馬湯より
 岡田の茶臼山着陣小都合一万七千余騎と皆同と
 甲府より三日路の所今度ハ七日に押入りしは久々の思慮ありとぞ備

此外海津小三
 千五百余騎 常を

一 萬七千れ勢と二ッふ分く雨の宮乃渡と遠くと巻海津との間ハ一万余
 騎雨の宮より川上ハ七千餘騎陣敷都て廿六陣川中端ハ充滿て是見へ
 一 頼と上杉へ使と遣し今度深くと清働海津を責めあふきと又
 某と戦ひ結りんや返答ふ依く其意とて得と有り謙信答に作義
 ハ早戦いの儀是は左右ハ可及と有り上杉の老臣等評議しつらと
 越よりれ後攻早くやせし度才ちて其故と此方より出く戦りん
 此の地形を離るはくさく敵の大勢備を設てきり所へ然も一ッ敵
 城を定とすハ利ありと後二ッゆら今れ分やく徒に對陣せば軍勢ハ妨
 らせば押迫らるく氣と屈せん越の兵来く敵定やく兵を半分
 く越率にむらひたさざら君と戦りん志とすハ一方打やせしハ飯陣
 けや易わくべしと謙信宣ひたれと第一敵ハ張陣してその
 機とるつと新なり善く兵を用れよ其銳氣を避て怠帰
 を撃といへまこのかやく敵をて河原にけし免ハ彼が謀乃

川中島
 小て信玄
 謙信と
 對陣の
 畧圖



色日小あささくく顯る庵一す敵い山陣に來るべからず
り來り攻べ敵初ノ工乃如く鳥雲山陣やく敵ふぐ一又軍
兵の狼ごんあつば放火乱取と暫く相止溜り成く敵の機を
ぞくふくられば予諷諷等閑小日を送るところなりおろして各
よく兵操を養ひ越の顧をさる事なることとて例の一重切の尺八
どうち一打しや吹く暮されたる

信玄種い別工夫ありて八月廿九日又西条山へ使を遣し出我
を待く數日中鴻小孫在とつども其沙汰喜之小信く只今海はへ
入珠さるものなり一戦の儀は左右次第をさる一や方と謙信
返事になく使使承りいぬは入珠のよう得まき息は一戦の儀
と近日は左右小可及者なりと信信言い茶田山より備と標下
一廣瀬中て下りて海津の搦手より入る一是の敵今にも出るは
戦むと道をあささく招く指小見せく用むれ心得なりとや

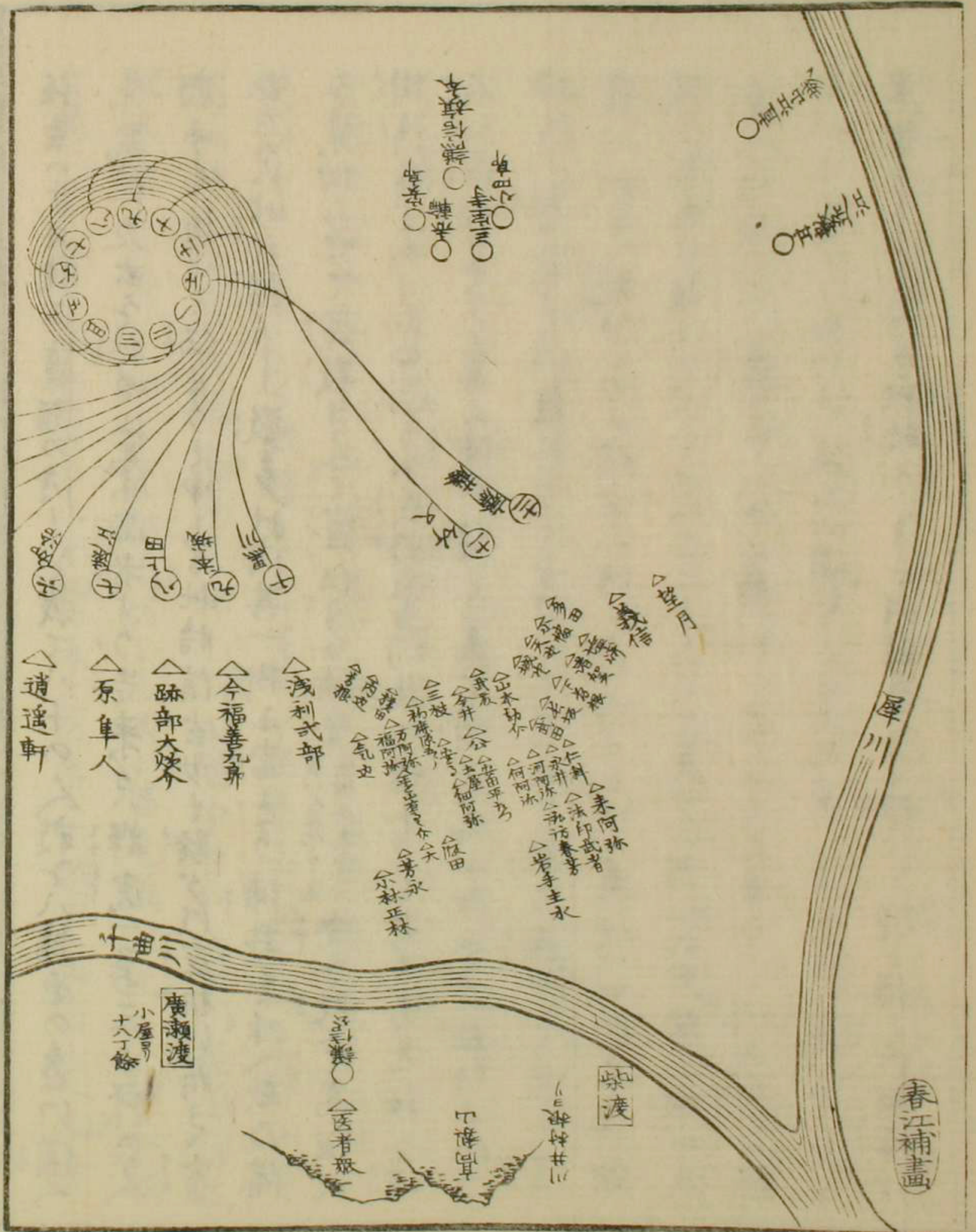
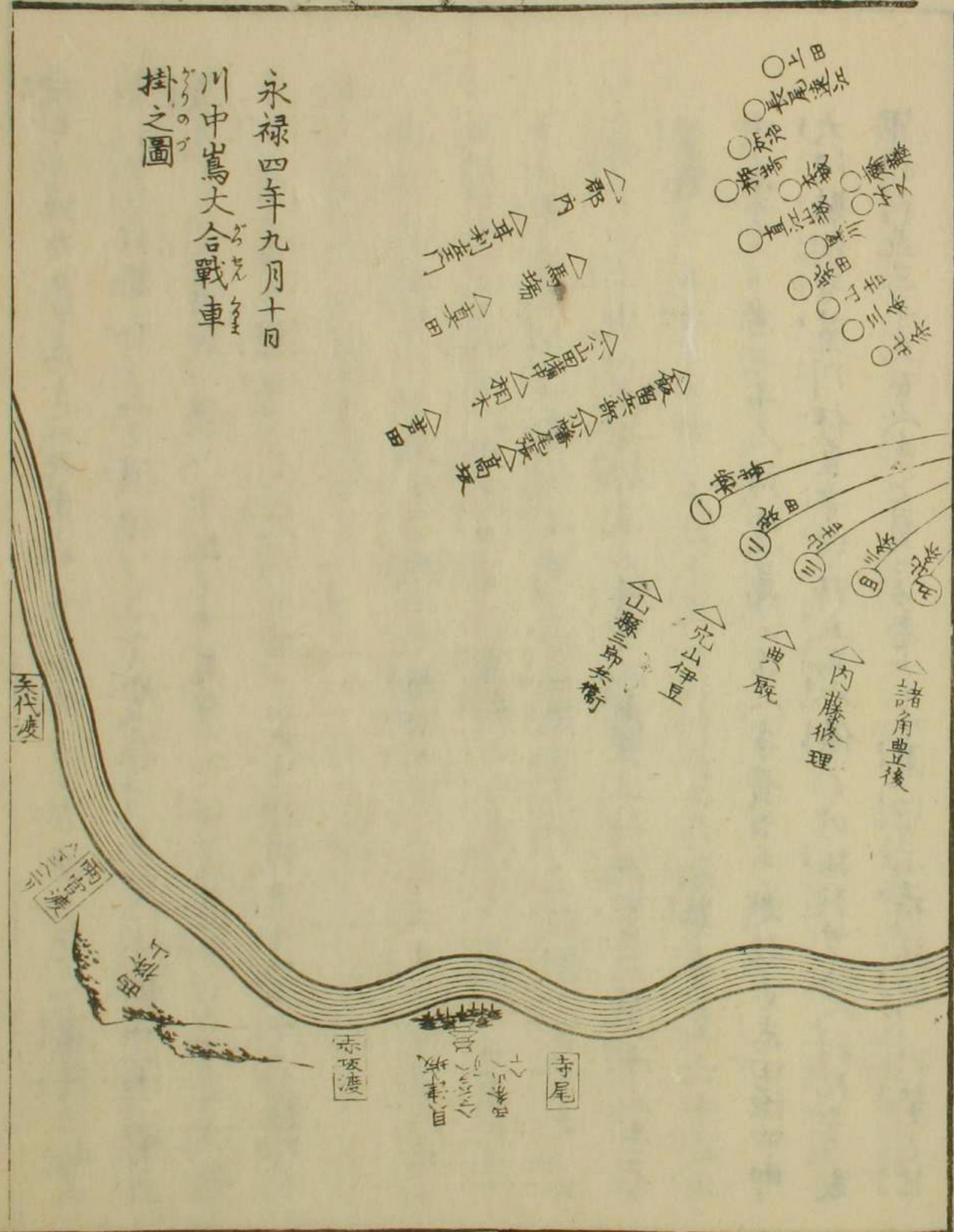
西条山小と謙信宇佐美を召く曰く明日の夜の内小川を渡
り信玄が陣近く備へ明方に旗を討くる破るやざりあつ二つ
乃間小勝負を決せん敵大軍なれども今勢と二つに二つ
も砥上山より吾陣の後へ出るさるる敵の大軍前後ふけ味方
かろば途を失りん今敵人数を分け小勢ふなりとる弊り
棄く逆寄せを敵思ひあささる左備かろくをれせん如何と
なれば砥上山へとり一勢はお客を待たる急に戦りんと思ひ
よろず志つる所と不意に討さる利を得ん宇佐美云その人殺
を分きたる事めゆして知りぬや輝虎曰吾對陣さるに於
夕昼夜敵乃陣營れ氣を見る昨日や相氣且夕に時を不違
あつは小今日如例未れ中刻夕級の煙管中により又申の下刻
小營の事に煙たらしむる物なり是兵をつらして砥上山へまりり
人殺明朝の狼を用意さる事鏡おろつるささく其勢おろし

ける以前通寄せば勝り疑ひなく宇佐美賢之に碇と手と打ら神の
妙なり其古傳をきく然る時小取て用ひざるは不知小芳より君
く此を附い半良將なりつれは下知あふしやるるや小れ
つゝ夜中に川をわつゝ敵らゝ陣を張り曉小國を掲げ討と
揃く車懸ふ打さるる

海津や軍評儀も區らるる入道道鬼が軍配ふ二萬れ人殺を二
万二千西条山へ也明日卯の刻は合戦をさす久敵勝るも敗
ても退りてころと諸將本組衆廣瀬を渡り横合に懸り前後よ
て戦ひ敵を礼せ引さる勢味方の待勢と退駆る勢とあはれ勝利
料ひたりや中上諸將尤と一等して西条山へ出る先陣小寺
高坂彈正飯富兵部馬場民部小山田備中甘利左衛門真田彈正
相木市兵衛芦田下総郡内の小山田小幡尾張以上十頭人数
一萬二十かゝ本堂より上り四の平三の平を越り西条山へ向ふ

信玄十日曉小廣瀬の渡りと越て八千の人殺と八幡原の色に備へ
先流の一たを待るよ不南者より告来るは輝虎一ふ二ふ計の人
殺や近くと候と申上る此時信玄少も疑ぐは床机に居り宣
ひるは昨日謀り一數多れ内其一術は當たり浦野を呼へ敵乃備
を見切らせて退散さんと宣ひる浦野民ノ左の云境を脱ぎ高紐に
掛たりあゝあゝといふ小民於左衛門敵の備をよく見て是れ汝ら流
石功者形をそと宣ふ浦野護り兼り頓く馬を打棄り馳行くの
はう驅るるは床にらうまわり大音や敵を遮りて見せ思ひの外陣に旗の色
犀川れ方へ赴りて信玄を渡り扱逃るといふ道理は如何さん敵
備を張ると様ふてくはらるるやわけて見せ思ひの外陣に旗の色
喜へ越後れ方へ靡るとい例の張引とてくはらるる大音やくは面を白眼
む信玄いよくはらるる流石の浦野も覺れ事とやその邪やれを
車掛りて二の手れ殺をまゝに勝負ふも構つて將と將との雌雄は

永祿四年九月十日
川中島大合戦車
掛之圖



決する備をたゞしは此車かてを停める方便をせん庸持の如く
所にあつた勤介とて濃機くして宣ひけよ山本勤介市筋に
畏るいふ入道歌の備を車掛りて見ゆを汝急ぎ馳むるは備
を止免よ其を練替たん先陣の者どもも使教多遣しては道程を
知らせたりとぞのこまひもる 下畧

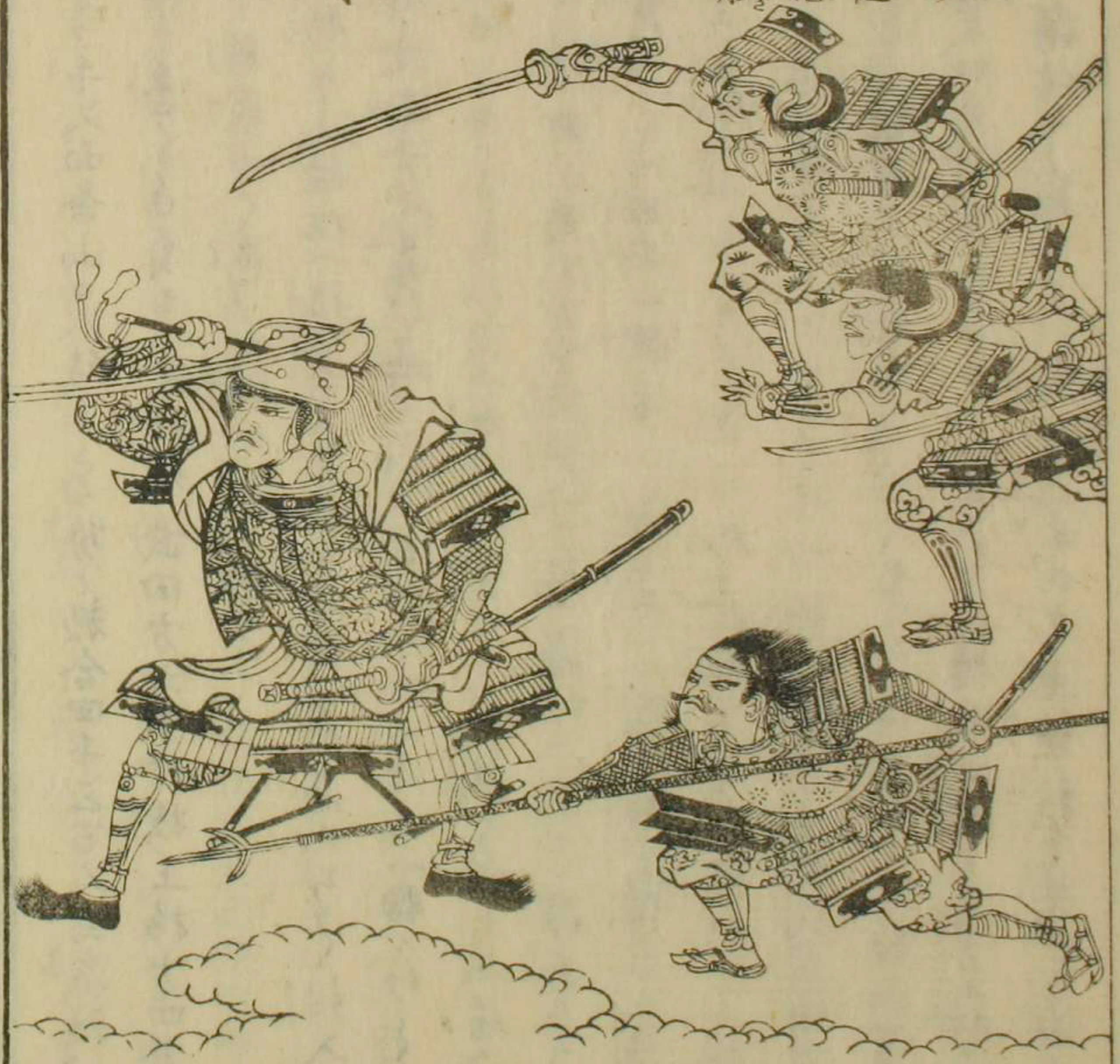
抑此日此戦を川中嶋大合戦とて後世までも名たつて同月の廿二
日いつくく双方に討死手負れ負殺おれし武田方あつた
法舍弟丸馬介信繁諸角豊後守初麻原五郎三枝新十郎をとり
一備くれ米配は免の物三拾き人無軍の討死四千三百八十人手負
量難し手負ざる者三千人小足らば討死の外越勢壹萬六千人此
内手負ける者三千人残壹萬二千人手負り越後方志田源四郎
大河駿河守荒川伊豆守宇野左馬次備くの抽刃廿八人討死あり
軍に討死二千九百人と負ざる者どもも直に小荷詰りて勢と甘

糟近江守が手又西条山口に残しつる勢と都合四千二百人無底残り
六千人餘と悉く手負り又勝敗は武田方六分れ換上杉方四分
乃負たも諸家やく色く評せやれ

かほ乱軍れおつ謙信は難支る者なきは信玄の床几ちかく討入
給へも法師武者六人並ひ居る山本大林と中の床几小腰けく
在るれば是信玄とと思ひ只一打と討多ひし切先を何れも届ら
む此時六人の法師みねた刀と抜向ひれば謙信はつと推系たり
と大喜に宣ひしその猛威小辟易して遠巡し進み退き信玄も謙
信剛將たれば立合の勝負いふと思ふ知れば顔あく居給ひしは謙
信二を刀り山本大林をうちり山本大林引外し退くる其切先信玄
乃方へひしめき故鏖の軍配團扇やくとひ除多ひしは謙信差
科利刀ゆ切先一寸やく巻扇へ切入りし時原丈隅と青貝柄の
持槍やく謙信を突んとけ放生月毛の名馬鎗影を見く通と

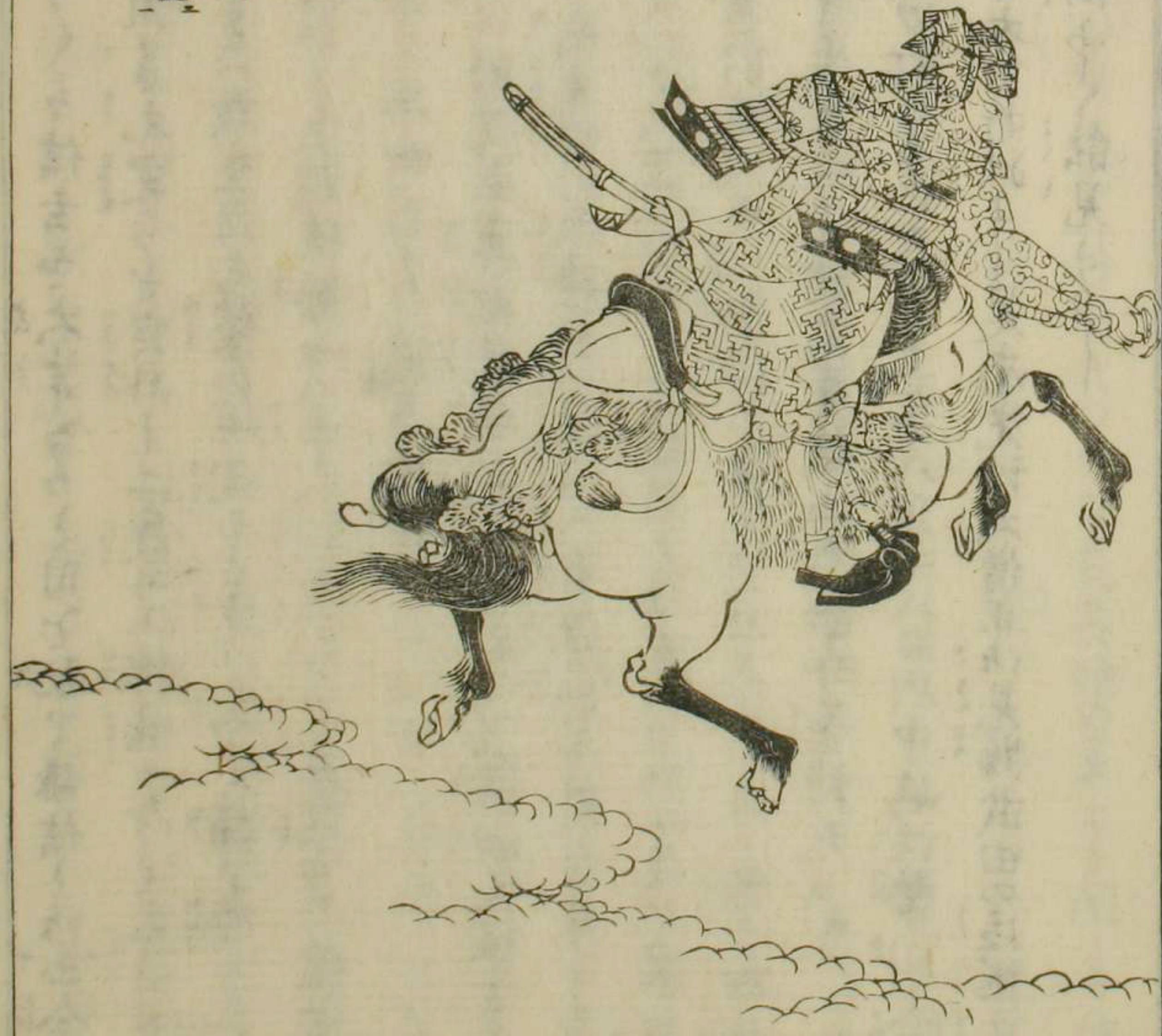
川中嶋古戰場を
 巡り折々懐古乃
 感情限り天
 老く山河更奈龍
 帝争つ々州本腥
 一まはばはははは

過川中島
 昔時酣戰地今
 日夢中着二水
 依然在薰風六
 月寒 華庵



全前
 元是英雄酣
 戰地
 而山雲合雨
 冥々
 須史雲散雨
 還歇
 萬頃平田稔
 稻青
 詩佛老人
 甲信英雄血戰衝
 急流如矢射雙驅
 於今兒女遼來話
 凜々威風在畫圖

幡野氏
 源忠孚



驅ぬきしり母のくも信玄を大軍なりと目と配り謙信と出合
方ハ極ふとせし左子元定らと突外一二度め小綿嚙ききく志し
馬の三頭と打たせし放生月毛驚れ十間を走り出く踊り騰るに
謙信落馬し結びしを越後勢七八十人引包むる立退り信玄
も近習と引具し半町を退き終ふ
謙信太刀打の時信玄軍配固扇めく討死といひ説非之信玄も
又太刀打たり南光坊の天海及び畠山入菴眼前小是を見たり
と云云又天文二十三年八月十八日謙信と信玄太刀打小及び武田
左馬介信繁討死云云又弘治二年三月廿五日の夜一條六郎板
垣駿河守小笠原若狭守諸角豊後山本勘介等討死云云
謙信信玄太刀打の事天文廿三年八月十八日川中嶋信繁川合
戦の時雙方太刀打けり是南光坊大僧正法見物武田の居堀内
権之進法供と見えしなり

本朝三將傳

武辺咄

藤田能登守曰我々元上杉謙代の者なり其時の事よく聞たり信
玄團扇めく受らせしと流石大將なりと譽ひと語りたるは糧虎
からつくと笑ひ信玄片手はく手細を取片手めく扇扇を持
しと吾輩と掛く切付る信玄太刀技と思ひつら中々太刀技
隙をなかりしと謙信申さるつらとなり

○諸角豊後守碑 廣田村の北 田中在り 傳曰諸角ハ典厩の備れらるるを見く扇從共
に向つてやけるべきの勘介といひかりし詞もありしなり止
まざれば所なりしと備を押しきりし是ハ道筋近きとやがく
典厩ハ押続き二れ手の極小備へたり諸長尾と陣を繰廻り並て
直江が人達の過半厚川小着ぬと覺し此時ゆきと據長尾と又は
そが勘介入道典厩諸角三頭と張り足輕を懸け銃炮と打立て
曳率ゆき寄来る長尾下知てまの究竟の時節るるを某と鏡
かけて一手切は伐りて款を據破と叫びて今叙も方く出るる

常ゆり長尾の我陣小二の手と添ふ事もたれ小今日の思慮深く
して傍倚を添へられ是と一手に搦る成る舊直小押寄きり
我馬印の甘糟が陣に甘糟が旗と我陣小交へりけ下かき多
くの惣旗を俯けよ手結の勝負に旗の挿入の思の外に僻事ある
このぞ河系の風強きま直小まんと成るく俯るの勢も強き者
ぞ 此故に武田方ゆくもこれ故小
を付て見ちよとまきん とて小馬中押立させて敵合近く成るれば
朱の采配退取くいふ面く斯様は矢送り列に射の懸をかき
よ體の袖をひき敵の方と見るさかたを端へ懸るに進むと夷声
を静小くすよと勇に懸る傍倚に懸信に越さきと真先小馳る
とこらに山縣之奔を来ノへに押おしる小端なく出會互に余殺る
く礮と突合るるが傍倚が軍兵半彼とく二町斗敗り傍倚と夫
少と管つて眼をも見どして真一文字に勘分が備へ馳付り長尾
も透向るく突く掛る勘分も是了を望所なりと真先よ進むかる手

或記曰

勢与力足輕まで入道小後より命限るに殺りり緒角豊後守
と内藤修理望月甚ハつ成るを晴と戦ひ一がらよりい急
から合戦あくる半に味方と見合きき隙と敵味方よりさりりか
勘分及小討死し結ひぬと即從軍の告りり如何なる故る者久人扱と
遜さぬ不ぞと敵の中へ詭入る終め討死さるる者
諸角豊後守昌清と萌黄徳の體に糟毛は馬小騰り大身は鎧をま
き崩る味方を叩き立安田が勢を逃捲りく血烟まき殺し形勢
適き武田小名を得し劉將たり須田安田山吉が軍勢つりり勇と
勵して三方より討つるに諸角勢七裂八截小敗走き豊後守及て
死期と思ひ定め近寄武者二騎切く落し六七人よ手を負せし
心力勞き高松源五郎が突く鎧を受損く左の脇腹突通せば馬上
で落ると馬去り即從深江八左衛門能勢治房八等之四人馳来り
昌清が首を取て退むとさるるを諸角が組石黒小舟を来浪人成瀬

永祿四年
九月十日
川中嶋
八幡原
乱軍の
光景



吉右衛門池来り討ぐる者を薙倒し首と取返し引退く

○武田左馬次信繁墓 更科郡杵淵村曲廐寺 本堂の隈あり 圍内小大樹の松二株あり其中央小

高サ六尺をり自然石の碑東面に建 碑面 松操院殿鶴山巢月大居士

右 永禄四年 辛酉九月十日 左 武田左典厩信繁と誌せり裏小も文字あり

苔蒸く見分がごとく

典厩ら々しを討死し思ひ定むしをまば信玄へ使を遣ては覺い如く謙
信をば甚く愛留くい穴賢甚を法救の法覺悟有るうとまひは問よ法
勝をを懸つとせゆとかり信繁その日れ出立まの如く花城乃鎧に掛取
打ぐる兜を着し重代の纒紺地は法華經の文字書くると掛るひし
今日と限りと思しきるや便解く臺に上げ綿雷ふうけく鞍乃前
輪に括り付馬を走らうゆふ棄り士卒以下知して曰長尾と見は細く
刺連よ端武者と討て罪作るか歸命八幡大神今日れ軍に長尾と系
會させ終へ只今とや討死して父兄れ恩を報ざるうや大善揚茶後

を指揮してたえける所小村上勢れ内より松本壺みせの法法炮乃
巧手観寄り電とる小あやまる次信繁の服臺を打枝は信繁馬に
耐得ぞ真倒小落身をを壺み走り寄り首と捨く武田の長山寺
妙之助其敵を退蒐く討傷し清平と取返さく形り

信繁れ馬と相摸黒くと殊小古秘藏たりしは死骸のつらりと立
巡り近所へある人あはれ飛くる驛より狂ひたり此馬を毎日茶二升
豆一升内直の飼せり且其上上手つら朝玉味噌一握り水飼料
とるごとくし由此恩を報ふたりと

駿臺雜話

爰に足利氏の季世天文永禄れ頃小至く賢と称まき人あり甲州
武田信玄れ才左典厩信繁是なり近代武巧とれ尚ひく德行をば称せ
さる故小信玄の名を馬とれども信繁の賢とかくまて世に知る人あり
今翁ありしは誰うひ出る者ありん信玄れ父信虎信繁を
愛して信玄が廢るるをありま故信玄父子不和なりしに群臣何

是も伝玄れ武畧に長なるを以て信虎をすく信玄小母の
付くべ伝玄群臣と謀り信虎をすし出づる距ぎりや
信虎甲州へ歸れ奉り今川氏直が外祖父より駿河
小出奔して今川家の壽云とあり年を経たれも信玄は父
をむく國に入るや信虎後小京都小流落して一生を免終り
信繁信虎の志子して伝玄と廢し信繁をまんとするを以て信玄
も知りまるとなきに必忌悪むべし夫に國小狭く信玄小仕方の危難乃
場有り父を逃出れば人のなきに露友愛のを有るに然るに信繁嫌
特の向小居たり兄弟れり少も連言あるやと國を見れば之を朝々
困小憐れやして人臣の壽を失つて信玄といふも常に親任して
疑忌乃をなく始終一の志あり其忠信誠実人を感享するにわ
きしていつ斯の如き方なき諸川中鳴め討死せしむるに
む義小らりて豊へ侍る信玄一生の危き折るれば此討死せしむる

ていつれ為ふ命を惜むれば主辱りやめらるるに死を
子の義をもちて快く討死せしむるに誠小見危授命といふ
し信繁へ柄恭謹をうるわく志を身を守るる嚴正あり候
物も汚俗に曰せば其の高風清節古人に耻さるる又一條の
合戦小赴く敵近くたつて人殺を急に荒く遣ふとあり
是れも信繁戦陣小勇りて兵を以て熱しむる事を知
まると然るに勇威武畧こそ兼備ありし易にいつゆる知果萬
夫之望あり此人乃類をいつべし嚮小信玄社稷に慮ありて早
くけ人をまき世子と監國の任に居りしめ甲州永く滅び
ざらゆ然に昏昧剛愎の勝頼小傳へし信玄死していつ候
織田氏れ為小亡さるるに事ありしむる

○山本勘次晴幸一本ニ入道道鬼古墳明合の橋の辺りから千曲川に川女が

○八幡原八幡宮今、本代立まるとり此邊の惣名と俗に水除むう八幡の曠野たりし

今も多く田圃と成り古戦場れ名のみ残り

○横田河原 上様田下様田と三村並 養和元年に越後れ城を即平資永と木曾義

仲と合戦ありし所なり資永四萬餘騎義仲三千余騎越後方敗走巴
女ら中三権頭が娘少くも別れ力を強く弓矢取ても打物取ても健へ
特小荒馬騎ゆく此時敵七騎討留く高名しりり依り義仲つづく
も召具して一千騎れ大将に遣さるる

○氷鉈斗賣神社 神名記 上水鉈村より

○川中嶋 千隈川と犀川乃同平田の地ありて信濃十郡れ内更科埴
科高井水内の四郡に亘るよ川と川中嶋四郡といふ天文永禄
れ頃争論の地ありし故村里に古蹟多し篠の井追分に至りてら
右の京伊勢道左の江戸街道は所立石の茶屋とて柳屋といふは繁
昌れ地なり是より程あく千曲川の渡口に出左の世井宮右の唐
猫宮深林の中に朱れ華表ありて後舟とて屋代宿小科より順路あり



立石の茶屋
篠の井の五丁や
お射して巷を

かゝ其余ハ
散在と

間の宿と

追分立石

の茶屋

柳屋に

川中嶋

戦場比圖并に
媛捨山姥半切
寺をひさく

是より屋代宿迄

一里なり其間より千曲川
操舟の渡りあり

○千隈川 筑六郡にわたりて今千曲小作 佐久郡金峯山の北より出づる始僅に鵜と隘むく

佐久小縣を貫て川中嶋四郡に堺をゆく又犀川ハ駒ヶ嵩に出で筑六安

曇更級水内の堺と行くと千隈川は尾合てよりきてちくほ川といふ越乃

新海より信濃川と云凡隣國へ流出れ大川の水源多死中み此川を

當國中よてれ大川之。扶桑略記曰光孝天皇仁和三年七月卅日信濃國大山類崩

山河溢流六郡城廬拂地漂流男女牛馬流死成丘云近くハ寛保二壬戌

八月一日千隈川洪水は溺せ死するもの數ふ人此水災六郡伊奈坂坊筑下 仁和

中の記れざり鴨記乃説も此川あるべし古郡にまゝる川なこれなり

万十四国哥 新統古今 君代ちちくほの川れさるるの昔むす忠とありつくはまて 式内親王

雪王 水のうみ降もつとちく隈河ささや峯の雪ふかきむ 道徳院

風雅 千隈川妻好ありすにたり清ていづれ時よとる雪 順徳院

幾ヶ山嶽といふ甲斐の國に界にありと未詳獨ハ山嶽とて指不ありふ似たり

ちくほ川春ゆく水也 絞糸 其南

種いづき青れ千隈をまき濁し 鶏山

千隈川の螢を名物といふも古言に之を傳へば初秋上旬頃數万

のゆる水上に群て傘に周圍をふ圓く成り昇降するを數回終ふ

と河水へ烈しく落く八方へ散れをれさや年毎にわたりて俚

俗是を螢合戦と唱へくその夜を見物乃童男童女群集する

とあり予水と毎月中旬其螢をみるふたさ五分なりともあり記

千隈川中の螢はさき石乃玉と光をそ飛りとせえり 利忠

千隈川の上川端は盤古社といふあり又高天原より度太の系あり

神軍をといふ事と祝家れ屋んといふ物に傳ふ又相本令小宮社

の跡祝部平宮丁なこれ地あり按本郡の諏訪の域之疑ふく

伊勢津彦の神乃身をよせりて地也神代の御伊勢の根田彦のよりゆ

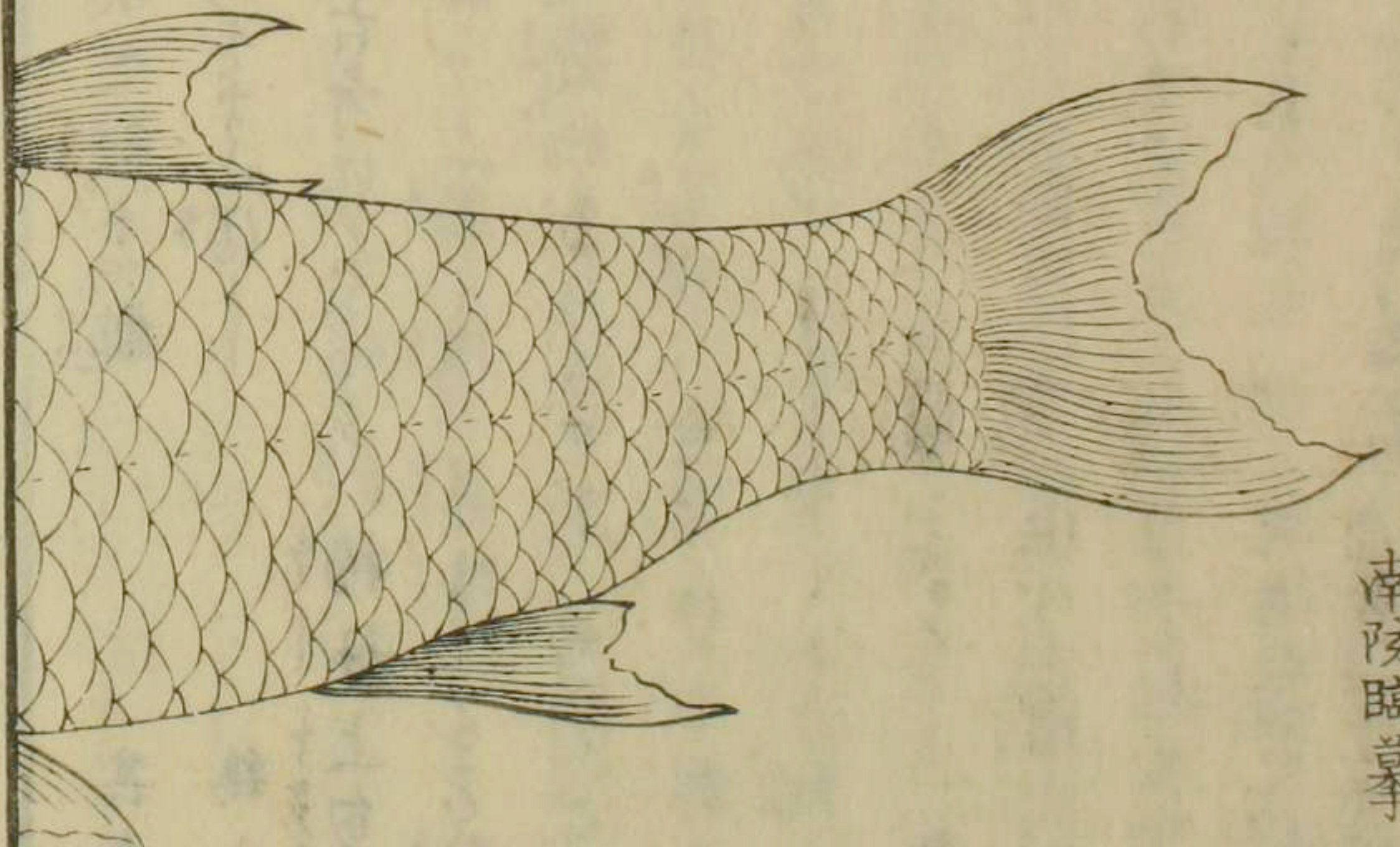
神武帝東征の日天日別命とて發兵欲殺之二神畏依して

棄て住神武を 神武帝東征の日天日別命とて發兵欲殺之二神畏依して

地名考

千曲川鯉魚寫真縮圖

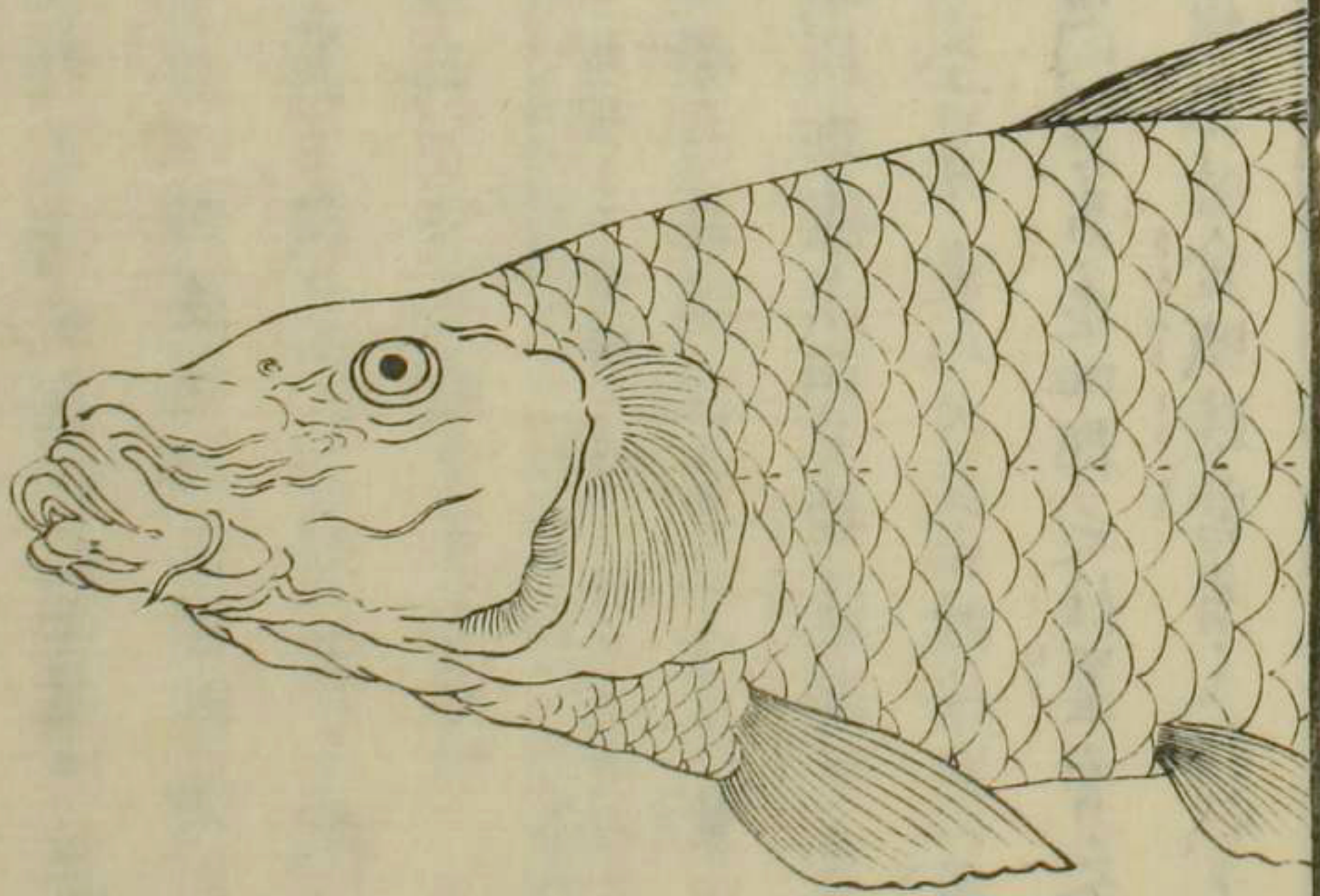
予南陵加月々此圖を收藏
 せし偶善光寺に詣りて道
 川中嶋なる旅店松屋某の家
 小憩息し前庭の生洲を見
 る若干此游鯉洋々焉として
 其形を得る如く如く其
 此池の鯉を人の雷小應し
 下物をにせしとあり小枝人
 の子産を欺るると想像し
 烹てて食らんものと禁むその
 荒鯉といふはつらつらつらつ
 尋らばあるはれ指し教へ
 めといへば此図のまじり



南陵臨摹

倍呼室永翰
 百号南陵氏
 醉漫揮毫
 勿為書画史

此荒鯉の首れ形馬のどく尖り
 惣幹に銀光ありて尋常此鯉
 鯉真鯉小異なり頭の尖まること
 赤鯉小類せるものれあり又いり
 病人腫えあるに鯉魚湯を服用せ
 ば果この鯉を用ふとまじりされい
 けに功驗なり世醫是を研究せ
 るては鯉を以て製薬し病人ふ
 接する者あるも依固く譏たりと
 語まじり予便嘆息して以為嗚呼
 已哉庸醫の仁術なることを解ま
 る猶如斯乎故今因小此図也
 此小説と掲ぐ醫家の病瘳
 々して病家を過つてのなると
 希る而已



國を奉て春日部河内國去伊勢津彦大風と起して信濃にさる

○西条山 又妻女山と云は信濃より山脈 永祿四年上杉謙信川中嶋出張乃時陣

跡あり跡今も井戸を遺る九月九日夜海津より夜討を懸

先陣高坂彈正二陣飯富兵部馬場民部小山田備中甘利左衛門

芦田下野小山田彌三郎真田一德齋小幡尾張相本市兵衛等合せて

十頭惣勢一万二千唐本堂より登り森の平大嵐乃嶽を越へ四の平三

此平等れ嶮路を經て西条山に到る時曉方りやい

○松代 古名海津其後松代とす其真田侯の居城なり十万人を収め武田信玄の時法也

海津往來 折南膽部別大日本信陽埴科郡縣庄松井郷藤澤里去代海津

と往昔清野後屋敷と天文六年未八月武田晴信公に屬し小山

田備中市川梅印原又左衛門在る並四郡之仕置有之同十二年

良弼山本勘介道鬼入道繩張る金城造管有く松代と号し

人皇百六代後奈良院將軍義暉公之御代なり此節本城高坂

彈正二の曲輪小幡山城守在城なり天正十年織田信長公隨ひ

森庄義重政八九十日居城今年七月上杉景勝公侍り入関四

九及在城同十六年森右近大支忠政居城此砌檢地有く同十

八年松平忠輝郷持城代花井主水在る並其後二年條河

料所なる平園正雲法代官所なり慶長六年松平忠昌同十三年

酒井忠勝元和八年忝清和原氏滋野天皇二十代真田大守

信幸賢君御拜領從上田侍入部 下畧

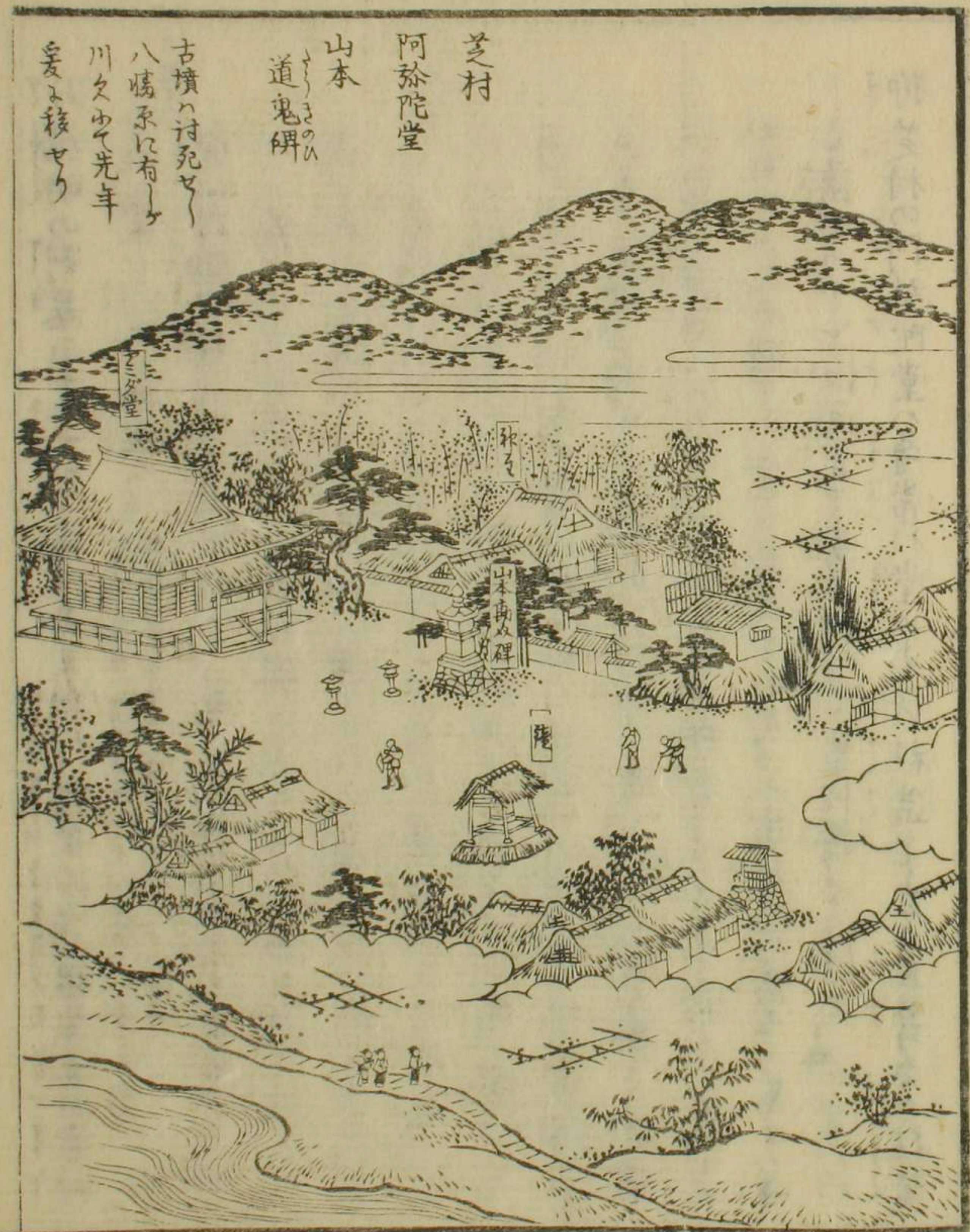
○祝神社 式内祭神玉依姫命 例祭六月廿二日山車七輛渡子綱引の者皆法

被編笠を着以古雅なり是を挽納く後三藩中諸士の馬騎あり

○蓮乘寺 海津城築立より此城下に寺あり依く高坂彈正公城裏より

時甲州より日蓮宗れ出家奉り以當置て建立させ安国寺と号し

今れ紺屋町魚氏の屋敷あり寺あり山頂より蓮乘寺と改め
 一や其後今れ處移りて又より此寺に位牌あり性喜院道
 日寛 兼應二己年十二月朔日とある 是に加藤清正家老加藤丹波といひ人の脚りぞ
 山本勘久晴幸 一本 頼純 入道と鬼塚 古墳ハ八幡原胸合橋の邊なり 今第跡田圃と云る同村長谷寺に守仏摩利支天の像と
 甲列武田家軍師たり初三列寶飯郡牛久保村 寺に守仏摩利支天の像と
 安き 小棲と躬隴畝を耕し或時列國に漂流して専ら軍事を能く
 其天文地理を曉し韜畧と諳んと胸中に八陣法畜へく天下乃
 安危を餘所不観く其牛久保に塾をそのあら天下二十四將の其一
 甲列の大守武田大膳大夫晴信駕を托く是と顧ふ事三度小おらび
 人を屏して籌を精好する事日々に密なり家臣遠山右馬次板垣
 信賢等懐ひて晴信曰我小勘久有るい魚小水あるがごとく再び言を
 復さるかなと宣ひ既に出陣あり日教僅に十五日に伺は佐州
 小放く九城を陥せられぬ軍師の計策小據より或人云和朝乃



山本
 阿弥陀堂
 道鬼解
 古墳の付死
 八幡原に有る
 川久保の先年
 爰に移せり

卧龍明の判基小も比せんや其以名高れ竹中重治穴山樵雪真田幸村

かど此山本が門子とや因之 山本勘未葉ハ玄平右京大夫内山本勘介同部十郎牧野 備後守内山本勘左門是正統三年の流あり

柴田因幡守勢山本を討取んと附幕よを勤み屍同小見るがし

一も臆しる氣色なく小高れ固ふら上り人馬の息と休し

遙く敵を見渡せば上杉勢潮の涌がぶく渦まきく及りるに

らば家期の戦ひせんと完ふして馬引寄せ徐くと固を下

けせば柴田本庄とるより引包て討えんと咄と喚ひ

討て驚り入道い竜れ雲を馳が如く柴田と一鎗よせんと突怒れ

本庄い道鬼と討取んと蛟龍の逆浪と拳る如く大地と蕩り戦ふ

に本庄が從率江間五郎大夫走來く横合小突く足を搦んと刃と

も斬と左馬介躍り入山本が肩先を打付る入道折れ透る馬より

と落りしと江間走り去り押へく首伐捲りける 下略

何この神を祀りしや今神主吉澤氏物髪少く傍に居住に

阿彌陀堂といの川の頃より唱へ来る故いよと詳なりと今北四輩の内

や稱よ北四輩順拜記小其来由と誌せり是等と詮とせん

○高坂彈正昌信塚 松代より東一里閑屋村 明德寺裏の山あり 高坂彈正は越後の押して海津

小在城一甲越和睦乃後病死し君の為國家け為誠忠と表し甲陽

軍鑑を著せり文政十亥年三月九日二百五十回の遠忌より憲徳院殿玄

菴道忠大居士と号し竜潭山明德寺の禪宗也高坂の用基 保科村属 巖間寺

永禄四年九月十日夜亥刻高坂彈正は信玄由父子と海津の城へ入

奉り諸卒へもましく兵糧等念入賄ひ其後我秘藏の士平山出

羽を近付密に私語るる上杉武田の弓矢を今日限り此後も上杉

より一面向手出しそ有ゆり我君は去よりも遮て取合有

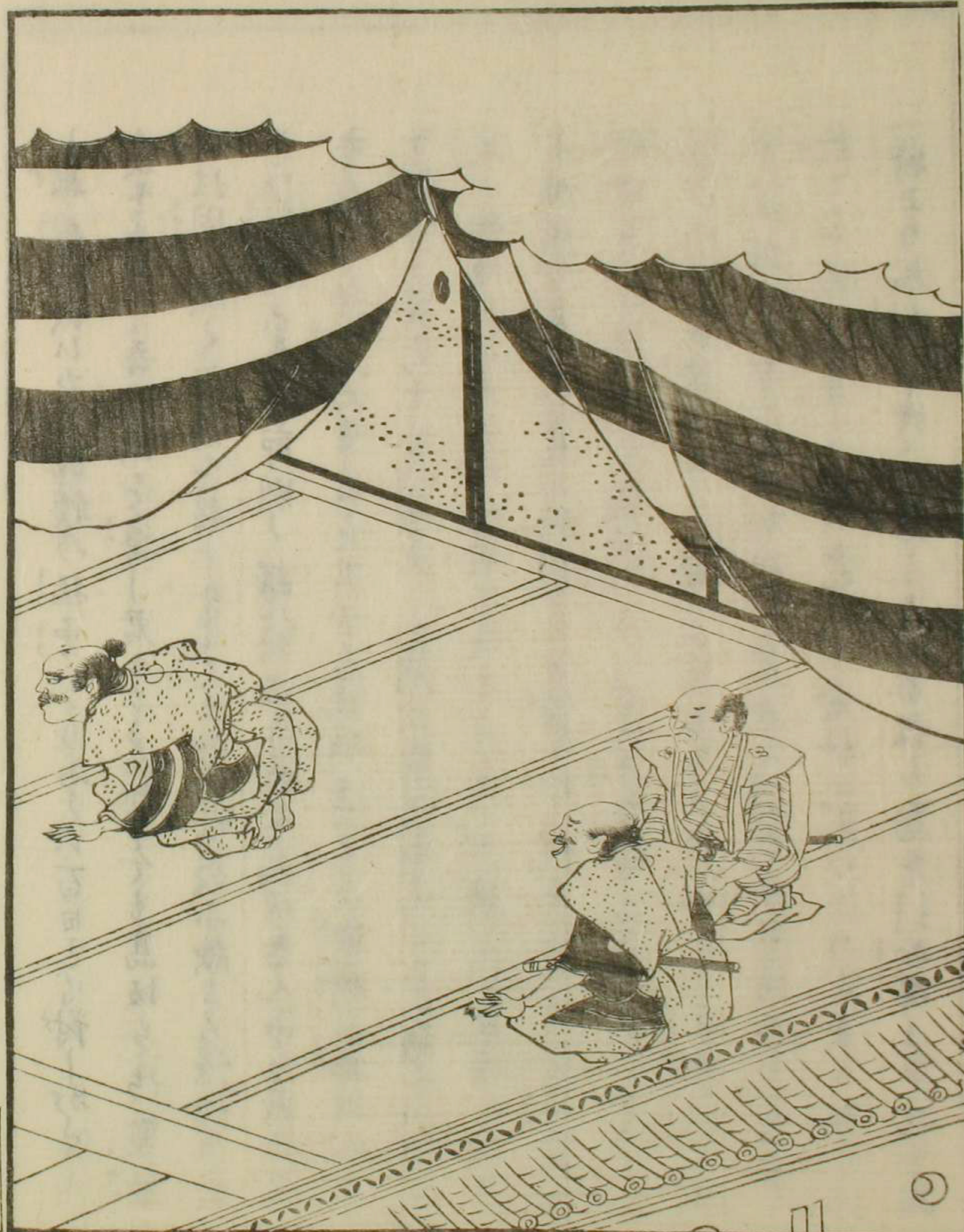
ゆり終つ共吾數年來此城に居して越後勢と一度も引交は謙信

某を主貢給はる事い高坂が武勇有ふをあらば某は謙信の法を

取受く謙信潔白は意地ゆへ吾尺寸の謀言に乘結しやうかき共
退て後来の利害損益と委論する時を信玄は病身ゆへ志を
清年倍たり謙信は勇健めて壯年形りを老少不定れ世の
様なれども先を信玄は祥世よく謙信は末永く世を知りあふ
必定り武田の家督太郎義信智勇れ大將されども近年信
父子の間よさぬれ模様出来呉越生ると見へる事乃ち愛
りう時を家督二郎及三郎及は病身をまへ四郎勝頼及と之
きり口弁及生立いうみれ手荒き猛將希代の若君かれと後
年謙信と弓矢を好む人節つそ謙信は比まき今武田上杉五度
乃戦ひぬ度たつ味方十分の敗軍大將士卒残るく討つべき強敵
かきと我君信玄仁義信明嚴賞知廉の八徳を自然と傳へ給
ひ士卒君の法命代り傳恩をまくり陣中れ法嚴對陣
の隊伍正しく身兵れ機變古今と無雙の大將たるべし謙信

と牛角れ執ひかれ勝頼の猛勇をうりあつて百日とも討しが
爰をりゆへ吾未然を察し君さうん跡までも高坂と清家盤
石れ固と成く君恩を報じまんとおりゆへ故ふ敵とる謙信乃氣
をへ取交へるは前別く謙信のゆへ後を和らぎんゆへ戦の果
きを流しや一入大幸るも其方と塩崎も又倉科三郷の人丈
と驅出し并火十分以用意して越後勢れ討と尸骸を引合よ
定く越後領乃土民等臨時れ追立ま来て尸骸と引取なれ味方
と領国方と二日五日延引くと苦くかへ先く敵方れ手也能く
肝煎るべし切つては謙信のゆへ吾と賞美せらるる後く手は
何をいへば私徳ありき君への忠なりと秀細小中會平山出羽
と名代回振小出猶又駒沢村乃戸田勝頼今井清八三士を奉
行くと戰場へ遣し塩崎も又倉科の郷村より人丈を驅出し
一軒より松明一本持持名馬持百姓と馬を引おどし戸板を持

九月十日の
夜中に
高坂陣
家士小
家乃で
戦場を
討死す
等と引
らむ取



番とて勿論その佛に依り鳥目と波とて觸るる子の刻は
隠れ集り遠江村も子の刻に馳来り千九百人の御民出々
上松方まで甘糟近江守より執後於觸也一けき盟十日夕方
より二千余人の人夫を催し甘糟手組波越十郎左馬長堀才八を
奉行としてその外役人左添戦場に出く高坂方此役人と式臺一夜
中より始り越後方此尸骸を福とを賣く限りに積置十二日昼迄
ふ引分相濟し六尸骸三千九百人一吟味して両方混雜せざるやう
に引取り上松方人馬不足なりとて高坂方より馬三百匹人
夫八百人貸し引取り也

他國にて斯様なる戦ひの迄に其夜より武器馬具弓銃炮を死入
らるる郷民に申に及び野武士乃類ひ集り討死此死骸を裸
にむき乱取もるる戦國の風俗なれど武田上松の弓矢わ
そひと軍果ると雙方より郷村の奉行夫く支配の小人頭道

作りの黒鉄其まれ組を引具一夜中無を焼す以断を立尸
骸相印等を吟味し中にも死果さる戸板一揃ふ載せく引
免け今度越後方大崩の退口ゆゑ手負多く帰陣の後死果る
者千七百余人と因をり痛手負一志二千三百余人是れ士
分たり難人希し小荷馳也一人夫千七十余人と數ふ不入武
田方の領國の事も人馬自由めて早速に引取り實小並類
ある戦後此作法弓矢の餘慶とをゆりつとる

此度兩軍討死引分高坂彈正厚く世話のせり服材崎和泉守披
露しけき謙信殊乃外喜悦ゆ誠に彈正も百姓なり一伏
信玄取立らとるり其眼力遠くを誇り士なり高坂方へ使者を差
越しゆく中謝とて一毎度高坂も軍外乃志疎なるはいつゆ
之越後へ用事ゆり中執をり中遣まへ其方も相を將高
坂より中越用事有らん中子前をくても早く達しをまへ

や仰渡さるる甲別方死骸も四千三百八十人隠し引九川中
嶋善光寺大室大勝寺甲別長谷寺惠林寺等に討死の吊
ひを付し蔵より法令出く丁寧の供養あり武具馬具赤子
共孫ども見分さを皆ゆり法施小納免さぬ多ひられ討死乃
妻子ども是を感し連きなる討死して法用小立所屋形様恙なく
所取陣の阪奪望乃至る異魂とも懐ひ下中と年頭五節白
如く互に見世式臺しりしハ乱世といひるが希代の風俗と謂ふ
一是ちうたかく付去れ罰を軽く賞のゆり威權昇く仁徳
高く厚れゆ急やあつせり

○永禄七年八月對陣乃節武田より上杉陣へ使して曰天文より永
禄まで都く十一年合戦暫くも止時や即従家子信臣多く滅び
執中當所の士民安堵するが所を去るも馬非人と成り道路に餓
死も其根元の両家武威を争ふあり斥候去民若干を救ふと不

仁有りあくれ軍を止め川中嶋四郡何ぞも属せんや所詮明日
互に陣中より勇士をへら一人づつ若く組討の勝負あて中流と
片付以後戦ひを止交を厚くせん此同をに打ち明日と期せん
中入直江山城守輝席は告輝席老臣の議を宇佐義進に出
て云今日本は英雄蜂の如く起る中に武田上杉川中嶋ハ久我戦ひ
甲別の大軍味方の小勢備間原に以て共君と信玄の西虎二竜の戦
ひありく萬騎一討に成るとも勝負付ゆると存けは信玄の不望
にほひ勝負片付近圍の小敵共を討挫き弘く勢ひ驍大ありて
大敵信玄と挫ぎ給へ是根を強く帯と堅くはるく大魚踏るとんく
をと棄て小魚を漁るが如くと云輝席むと同く信玄の望もまうせ使
を飯も板上枚方勇士と選り齋敷下野ち為本内長谷川と又秋重と
定む武田少々の安間彦六弘重と永禄七年八月廿一日兩陣勝負を試る安
乗出長谷川宗光勝負何方付と共ぬさるる末代子矢乃

飛達とて一と長谷川組で下るふと打を刀と枝安間ヶ頭の前より差
甲州勢掛らんと信玄制してより不運なり以上約を交する小あり
もと是より川中葛城後領と成り人救引丸を安間ヶ息孫越丸知家物
頭に取らるる長谷川も又上枝加恩あり

松代より関屋村へ行きて炮火山の南より樵路を経て皆神山乃麓を巡り天
傍の古城山と巖石聳て雲上小秀とると左に眺み野徑を郊行し
く明徳寺にのりて拜まの具足鐘騎 鞍堂什物とん高坂の碑へ寺より三町ほど奥深林
陰涼地ふ建り嗚呼此人也春日大隅とつる百姓の家より出く
甲府小騰用せりも勇敢に更あり義智を以て君家を補佐し仁礼
とて敵將を感動せしむ生涯の行状想像とて石碑を撫つ無端
に袂を濡し懐古の情頻小胸を裂く折々山寺に入相乃鐘小驚の
さきく卒来し道を急げ州産集世に中びよりや歎くいりさゆけに形に
を山ふも人ら位々をさむいささみく其夜を屋代宿止る

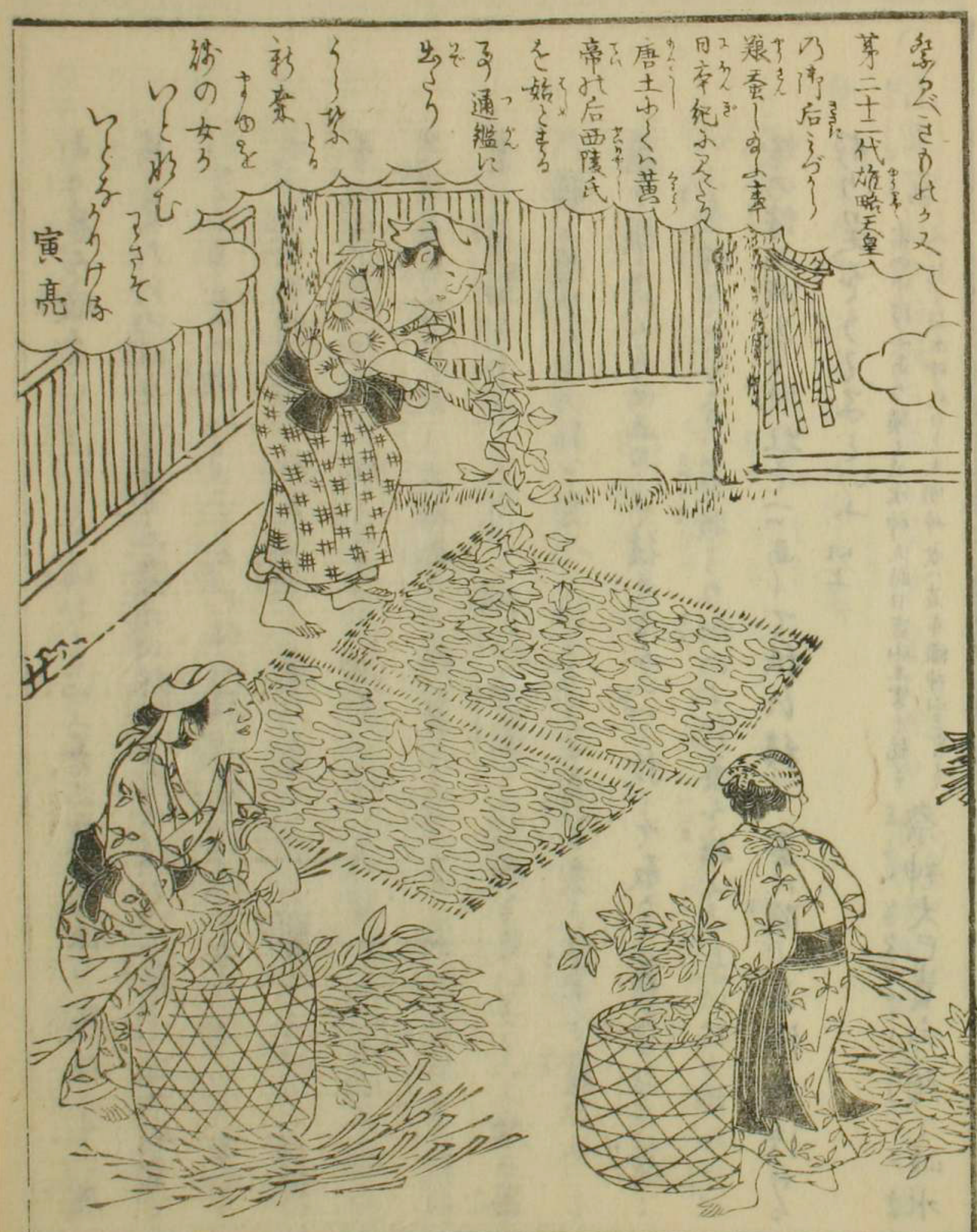
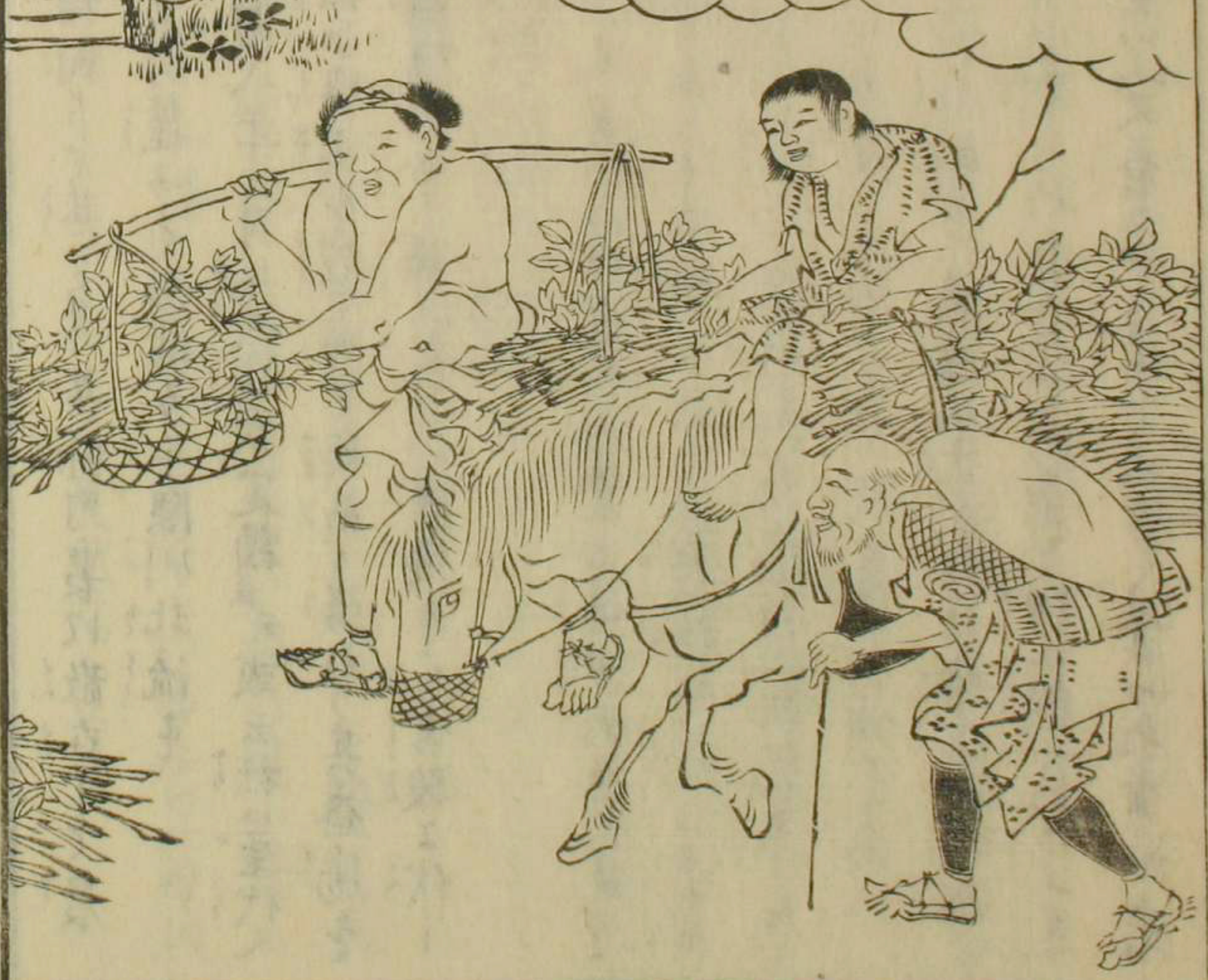
塩
矢代

坂本三里昔ハ社 又屋代と書け 八丁程相對して巷とて一其餘町裏に散在して農
家多し此宿一重山の麓あり西浦と千隈川北流也

地名歿 按三代實録貞觀八年二月矢代寺預定額云或云社ハ屋代
上古れ時を地と弘ひ齋場を設て神と齋祈る儀あり其齋場を
ユミバなるといひて齋場を屋一落といひハ齋場りく宮殿に代
よりれ義あり右代宿にいふかか〜のり

此邊養蚕乃家多し本曾れ山中其外山間の田畠少れ色ハ是を
つくるみく世と流る杖とるも又優し折々繭の揚り前とて家毎
小開りくめゆる姥小女も産と素の持とて松が枝の折あるとて
に携へて故郷中へ又訓わ産業も又流るる其養蚕の始末を関に
蚕種の紙に産付るる春穀雨の前後小生も出ると歸るといふ既に
帰出く一番のまゝも別ら折後へ入来れ桑と細小割とわく是
を黒子も一ツも共つて又蚕を桑をまゝく食りね幸四度

夫耕織は二つの者も天下の通
 賢者て男女辛苦のまに成り
 夫の教と耕一女の養蚕して情
 を繋ぐに李紳が農と憫む持ゆ
 錦糸日當午汗滴禾下土誰知盤中
 殍粒皆辛苦 又無名氏が蚕婦の詩
 昨日到城郭 歸來淚滿巾 遍身綺羅
 者不是養蚕人 ありはとて織者
 ら服せり耕者の餘の食なりと
 つる古言と思へありとる方
 もぬろ



あまのさひれく又
 第二十二代 旂略天皇
 の時后(うご)の
 親蚕(おやこ)の
 日(ひ)を(ひ)たふ(たふ)る
 唐土(から)の(から)の
 帝(みかど)は(は)西(にし)陵(りやう)氏(うぢ)
 を(を)姑(こ)と(と)ま(ま)る
 り(り)通(と)繼(つ)い
 出(で)る
 新(あら)茶(ちや)
 柿(かき)の(の)女(によ)り
 い(い)と(と)ぬ(ぬ)む
 い(い)と(と)ぬ(ぬ)む
 寅(とら)亮(りやう)

あり是を眠るも泣むも体むも一ノ身二度目の体を高体も二度
居ともたけの体共一ノ身二度目の体とふたの体といふ也く体の肘葉と
あてより其か減りり二どめれ体の後次身以大より後く多く
成ゆ意外の竹簾やうれお小移一葉の葉を割て製するにけいけい
身四度目の体と大眠もあこれ体共いけい退付起歩き肘を伺ひ
其用意をなれ既よ大眠起して後の葉をさるる前よりけいけい放
棄を採製するもけいけい一ノ身一蚕繭と作る肘とをい子といふ度き蓋
乃類小推柴などのおとさ入るけいけい一蚕と並く葉を覆ひけい
繭を張らるけいけい四五日して後まゆをづ放して取る繭を籠と
けいけい蚕種をさるるけいけい族物より形のよけい蚕を撰んく糸に括り釣掛けバ
蝶の蝶も成出る牝牡をいけい紙に移し蚕を脱く子代産けいけい
けいけい是をさるる子といふ以上

○山王宮

宿の中程ふあり須岐水神社日吉山王宮と統そ
又ハ須岐水神社日吉大明神或ハ波布羅神山王宮

祭神大己貴命須岐水

神事代主命相殿七座 罔象命 豊玉姬命 速秋津彦命 速秋津姬
命 少彦名命 保食神 国常立尊

○本社 一宇 南向 四間余 棟札 延長二年甲申八月神主竹田右守太夫

○幣殿 一宇 二間半 拜殿 三間 行事殿 二間半 佛供所 神水井

良の方に ○影向石 乾小 石鳥居 高一丈三尺 明九尺

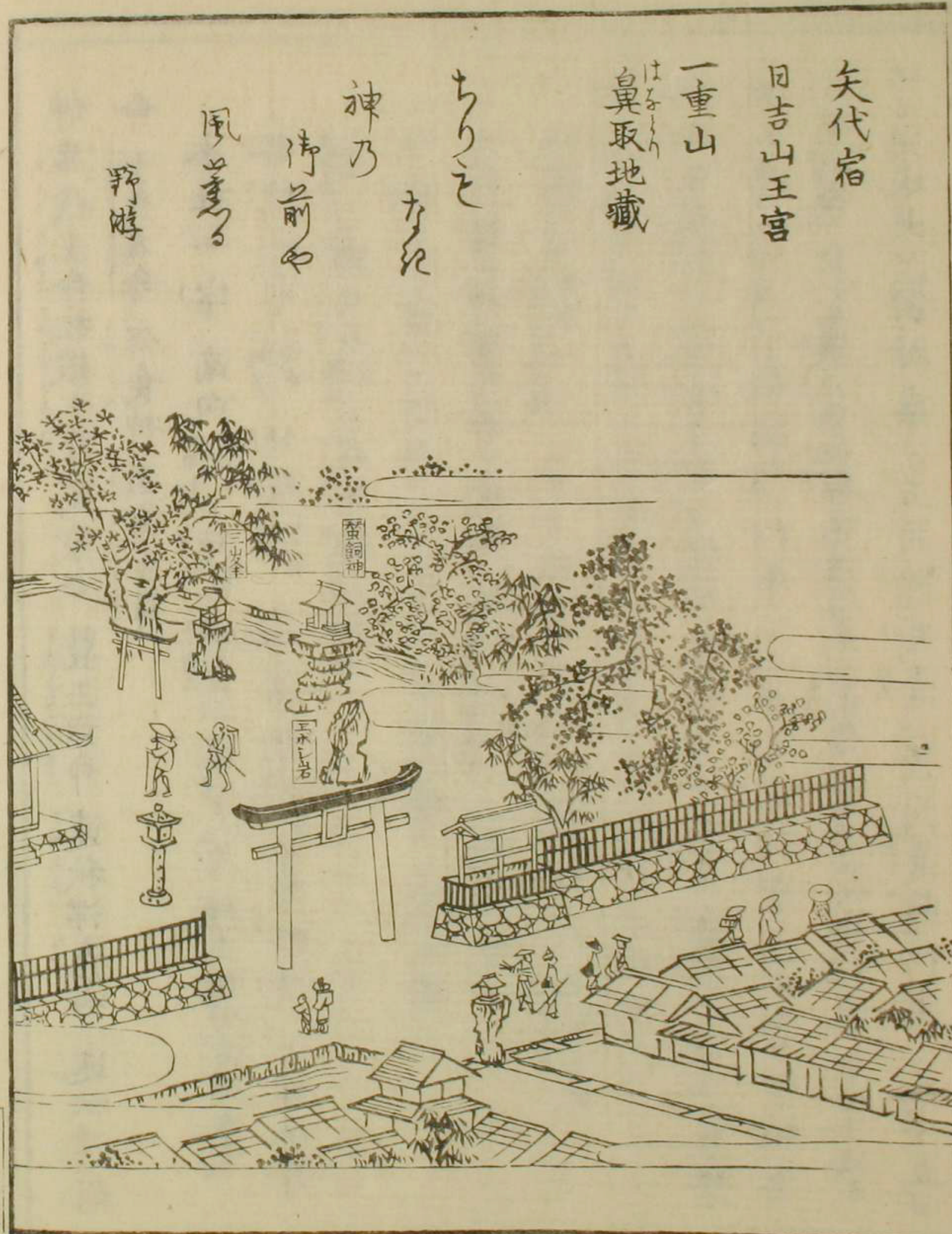
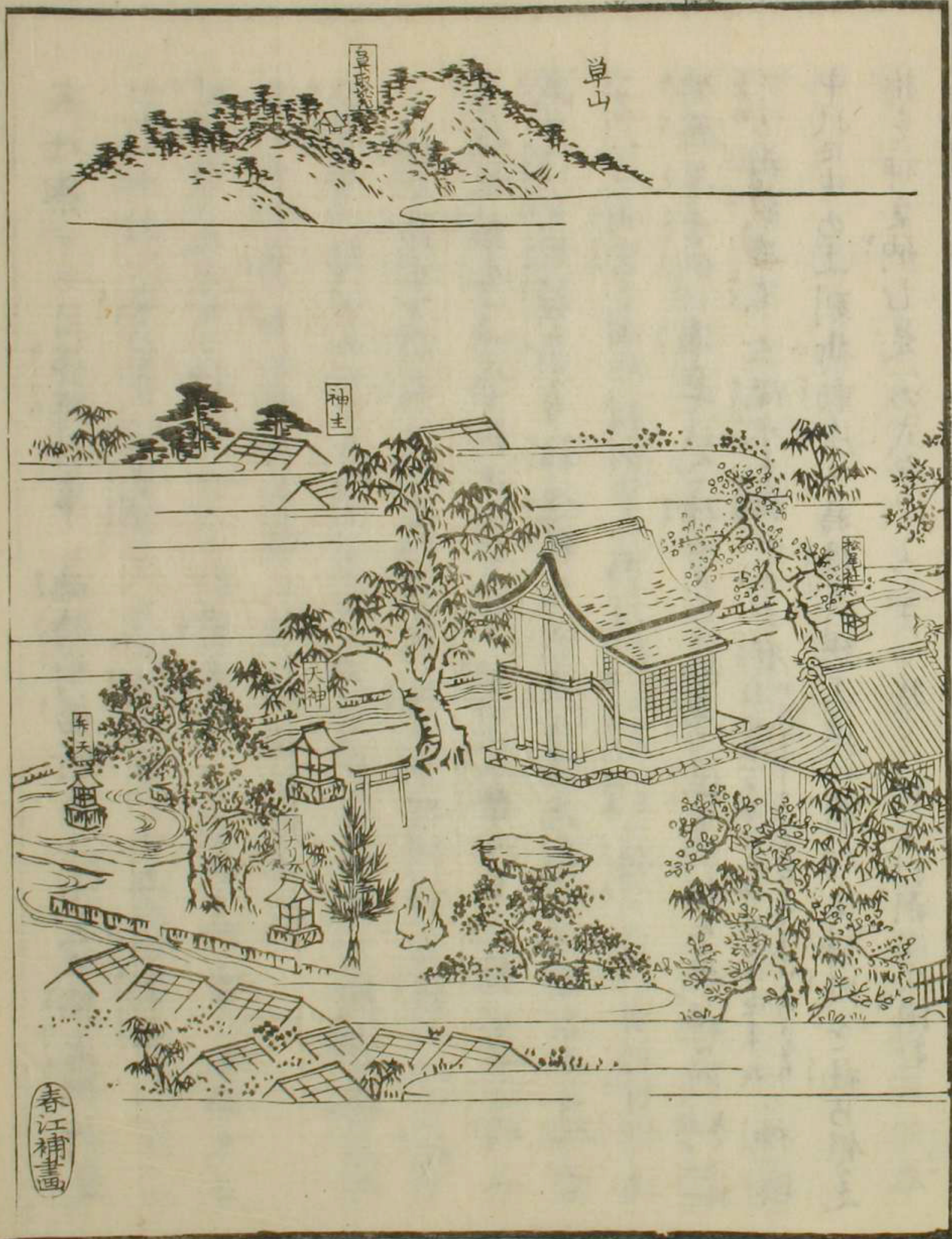
△神寶。水玉石一。稻玉一。子安玉一。禁厭比禮一。蛇の比禮一

○大鏡二面。神鏡廿二面。唐鉾一振 水内郡倉橋部 廣人寄附 長刀一振

○騎鞍一口 酒井宮内少輔 寄附 弓一張 矢一手 當郡兼井村 村松土佐守寄附 御掬 本塗 紋六連鏡

△年中行事

正月元日より七種迄天下恭平国土安穩の祈念執行
但御年越行支傳來古例音樂神歌用之。正月十五日 蠶祭。同廿日 草祭
厭之事。同廿八日 疾病除の行事。二月八日 水神祭。同十五日 崇神祭
同末社祭。廿七日 鎮火祭 神樂揚湯行支同星祭。三月 花祭行事。四月初申
の日用水大口明の神事。五月 惣祈念。六月 夏越行事。同十五日



末社祭。七月イフツキ曇拂行事。臨時祈雨行事。十五日稻虫拂行事。廿七日御射山祭前夜燈籠籠掃。八月相撲神更。十五日祇園祭。二百十日風神祭。九月九日行更。廿八日新嘗會。十一月相嘗行事。臨時冬至祭。十二月節令年中行事清大被。同晦日疫神祭。祭禮四月中申の日なり初の申日大口明乃神更とて早稻倉科山の三の瀧の清水と汲あせ水玉に神前へ供へ水神川神五穀の神と祀り屋代堰組合て十八ヶ村用水の大口千隈川へ小幣一本に穀水共一時小流も仁先規領主より神供料に供薪に傍物忌行に榎木亦下右へ屋代と雨宮と両社に納廿五俵之但十俵八在代神主 十六俵雨宮神主。極月法門雲位連傍供薪等吉例の通並下い。儲四月系乳菟日造甘酒餅を供神前二餅の形一は餅の形一は餅。神鏡磨式。三滝水と梅水ゆく磨役人長一人助三人淨衣ゆて磨末丸。神輿申此日申の上刻御動座于時往古へ領主進神前神主神酒を初め祭之指を神主納む是一の式なり。今ハ一ツ物とて領主に形あて濟む。

○雨乃宮山王より法途の行列美麗を盡し奉。於是當社神輿供奉此行列を構へ法先追とて神供神酒等雨の文へ送る次は榎次に四神の矛まより次矛に續く一ツ物とて諸侯の形の警固騎馬武者弓矢炮槍長刀神主に駕輿丁白張布衣素襖掌下先手後手練物行列供奉此者都く三百余人古例の定数無相違次矛と守り雨の宮神幸以時雨宮山王に神輿と華表前に居る其前を通る唐崎の神旅幣は榎居る雨宮神主奉幣祝詞神輿還沛の時雨宮の行列供奉始乃あ。神輿通行道矢代東裏往還の側に小道一筋あり古道と唱ふ往古任國の領主埴科大外從五位下金刺舎人負長城内へ神樂法途の麓大領の門前へ直に通りの道筋故古例の通り神幸なり。

○同日雨の宮山王祭人数

兼	鉾物	二人	行更	六人	兼	右大臣	六人	
兼	丞相	六人	兼	社宮司	六人	兼	龍大臣	六人
兼	飯繩	六人	兼	供丞相	六人	兼	兒踊	七人
兼	御鐵	二人	兼	陽獅子	六人	兼	嘔揚	十人
兼	寶珠獅子	六人	兼	陰獅子	六人	兼		

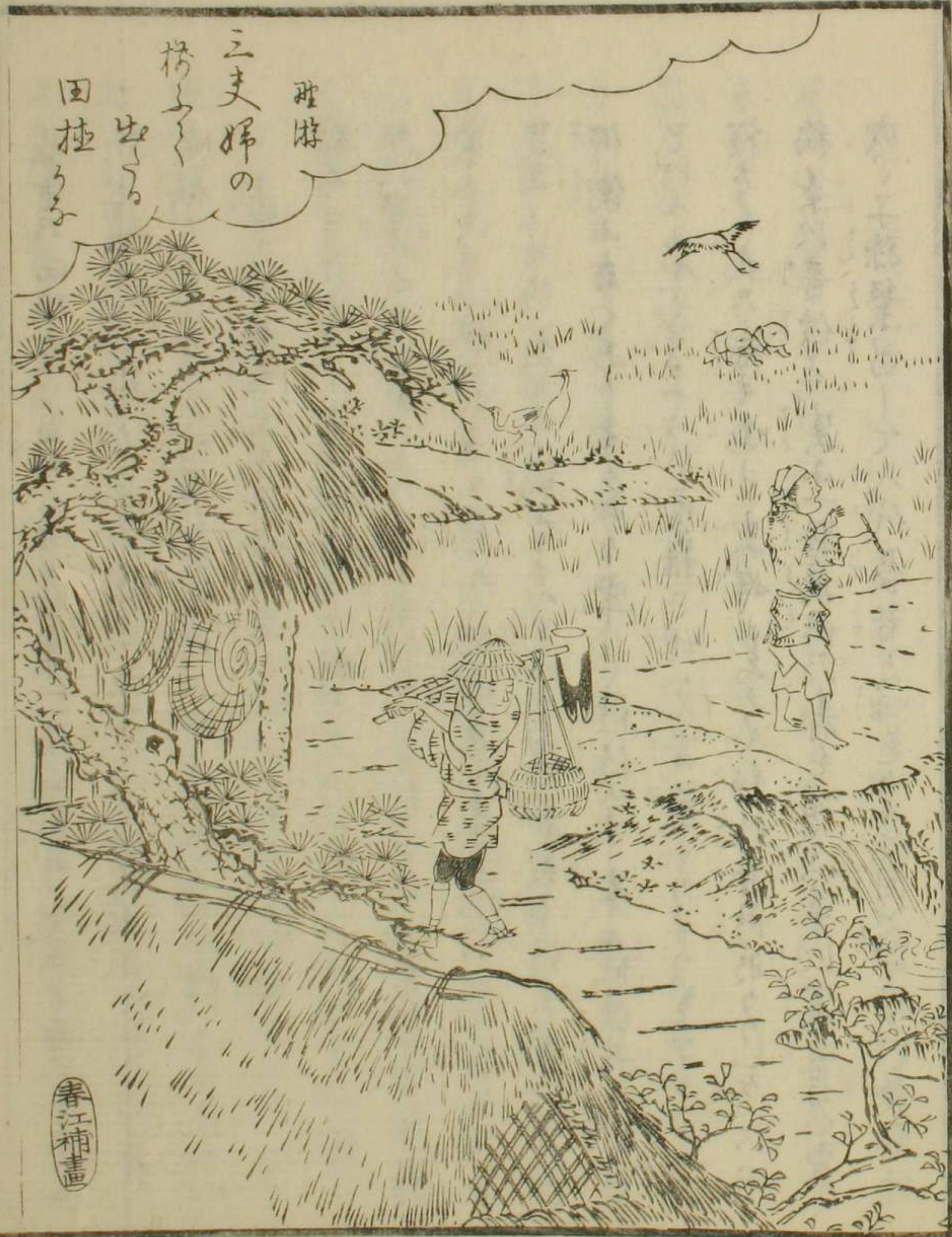


同巻乃後
 むつ佐州早魁
 帝和泉式アと使
 去て雨と乞ひむ
 式部和奇と詠して神明と威
 勢をむす方
 りこまや神のよなる系
 かきそふの文へ何とてふ
 五穀を統一國土安穏ありと
 名師 詠て下米の文といふ
 神号を擲らば終つたり



春江補畫

四ノ四十七



遊
 之
 支
 婦
 の
 橋
 出
 田
 極

春江補畫



地藏
 不
 さ
 つ
 僧
 と
 化
 して
 馬
 の
 鼻
 を
 取
 と
 する
 因

四
五
十

長者乃田植りくちやと田唄を傳ひ植りきり女限りぬくよろこ
お小僧よつゝの修りたるをば馳走をなす福どめ日と十日も留まりて
妻飯まき先糸くせん必おむせ終るく同ゆとバ小僧をよららび
うら鮮るる氣色ゆく芦垣に渡り休むひめ女の妻の飯持乃けを
取あて先あり一所を見よバ小僧が一門小おく呼ぶどもく送く
せは驚てらつたあつと尋求むとも乃方知くを詮方ゆく我
家より小僧の約束も預んと地藏尊へ参り伺へばゆきや清手
足たゆめ汚れまで泥ふまらまら馬け鼻取一竹を縄付くは
俵側小まきありきる扱を常く信作たり奉る地藏井のぬを蒙
りけるぬやとそふとさ有羅さ縋らん言葉もたうりきるとまとうり
程なくま乃病も愈く主婦めるとも耕作ゆゆりしは秋風
編糸に音信く実ふ一粒萬倍乃壽を唱へ次第に富貴乃身と
成り子孫繁昌して八代長者と呼ぶる此因にて今に鼻取地

藏と稱しきり 埴科郡矢代邑山崎山地藏院大福寺持也

○屋代安藝守義綱城趾一重山小あり村上家分地屋代二郎宗盛乃
末葉たり此子孫今三千石ゆく御旗本にあり

○菽蒔村 立場あり真田織の帯打紐等と名物とけ奇麗なる土産
なり又家毎に遠目鏡ありて千隈川を隔く姥捨山を眺望す

○下戸倉 八丁程お對して巷とかな立場く有明山の簾ゆく姥捨山の西に
見ゆ上戸倉荊谷原右ふえて算の渡場あり又横吹といふ村上家乃
古城山の腰で岩石屏風を立たる如くかなに右と千隈川の急流渦巻
て眩暈をなれをうりる冠着山西小相對とたせ代三羽の白碑あり

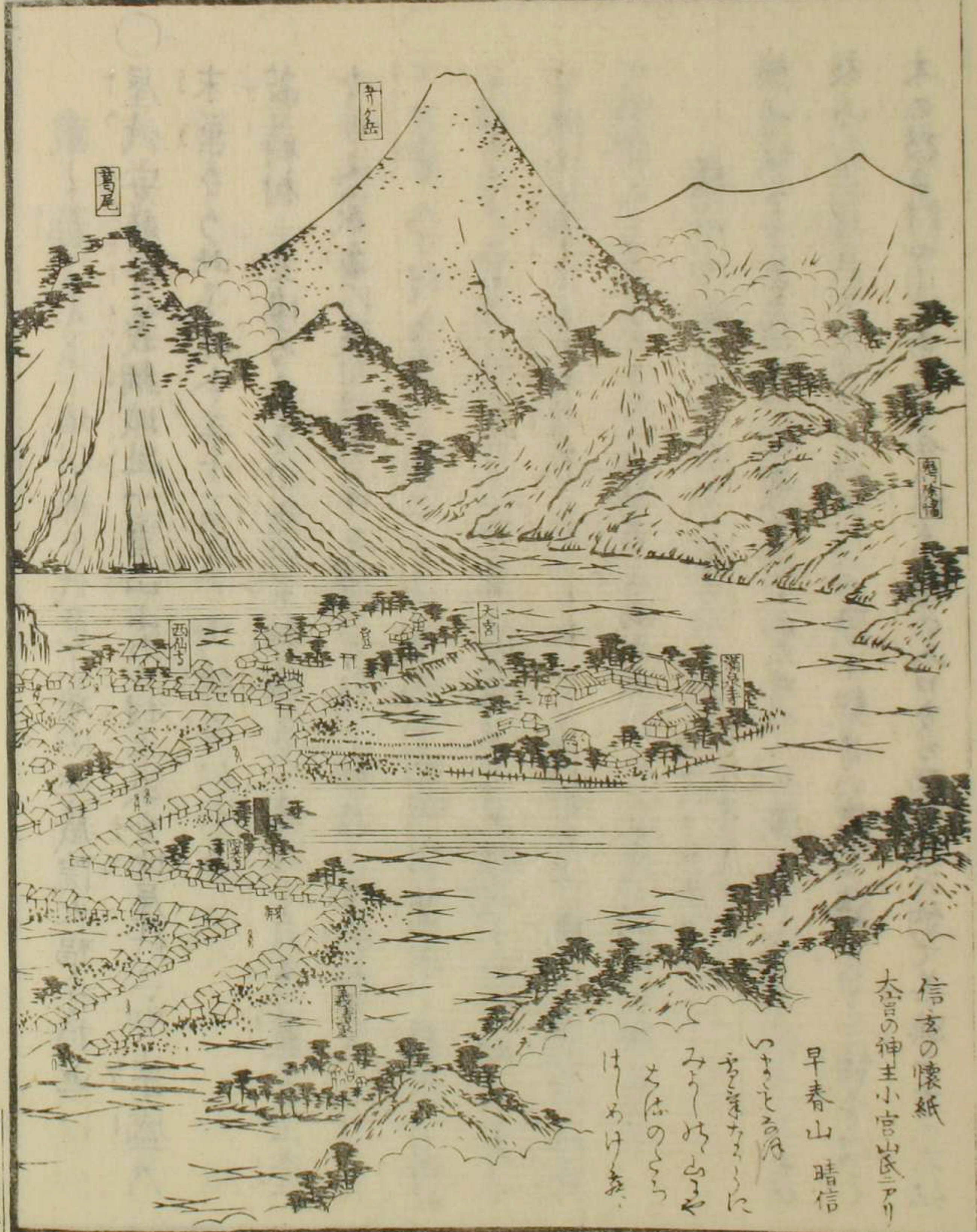
横吹や駒をいねるく雪のし
或曰はる芭蕉翁うい
か賀産の窟中かうせ

横吹坂を下ふたの谷に地藏井れ丈八斗なる石像有るはういふその
故らむじ徑式尺八寸斗の鍋蓋程の鏡小観音の像を鑄るる鎮を以て
本の枝よけありてありけ今い坂本宿の入口なる西仙寺に納て其跡小右の石仏

坂木宿
 横吹
 坂木神社
 満泉寺
 心光寺
 西仙寺
 葛尾古城山
 五里ヶ岳
 焼飯山
 千曲川
 中崙
 村上義清塚



春江補畫



信玄の懐紙
 大宮の神主小宮山氏ニアリ
 早春山 暗信
 早春の山
 みるみる
 とはの
 けりけり

を建くはうし佛といひ傳ふとて往古の仕立場なりとぞ

坂城植木科

上田へ三里八町榊坂城とも書け九丁程相對して巻を方けむうい葛尾の城下なりしとぞ坂本のい南条中条北条とふる南条は今麓宿といふ中条は今中条村なり北条は即坂本宿なり

坂城神社 葛尾古城山の麓に村上在城の以城内なりといふ
祭神 大己貴命 事代主命 又健南方命を合祀す社傳不詳といふ
人皇 二代景行天皇は清宇勸請と申傳ふ郷東の野に飯炊平といふ所日本武尊富国通行し給ふ耐言備武彦此所にて飯炊の事と計りてい傳ふ其意に清射山明神とて祠あり尚社の附屬といふ神領は村上家の領三百貫文其耐神主小宮山和泉守兼武乃社職といふ其後甲州領となり永祿十一年に武田家より七貫文の地を賜ふ村上家此兼守抄の寫

尚城に法守大文清神伝承百部指貫文の日記あり

之早お自今已存断ふて者お遠々早免祭礼亦不てき

鳥傳に社傳出さるや仍ゆ件
天文元年主 歷代執中主

二月主 村上朱印

坂本大文神と
小宮山和泉守

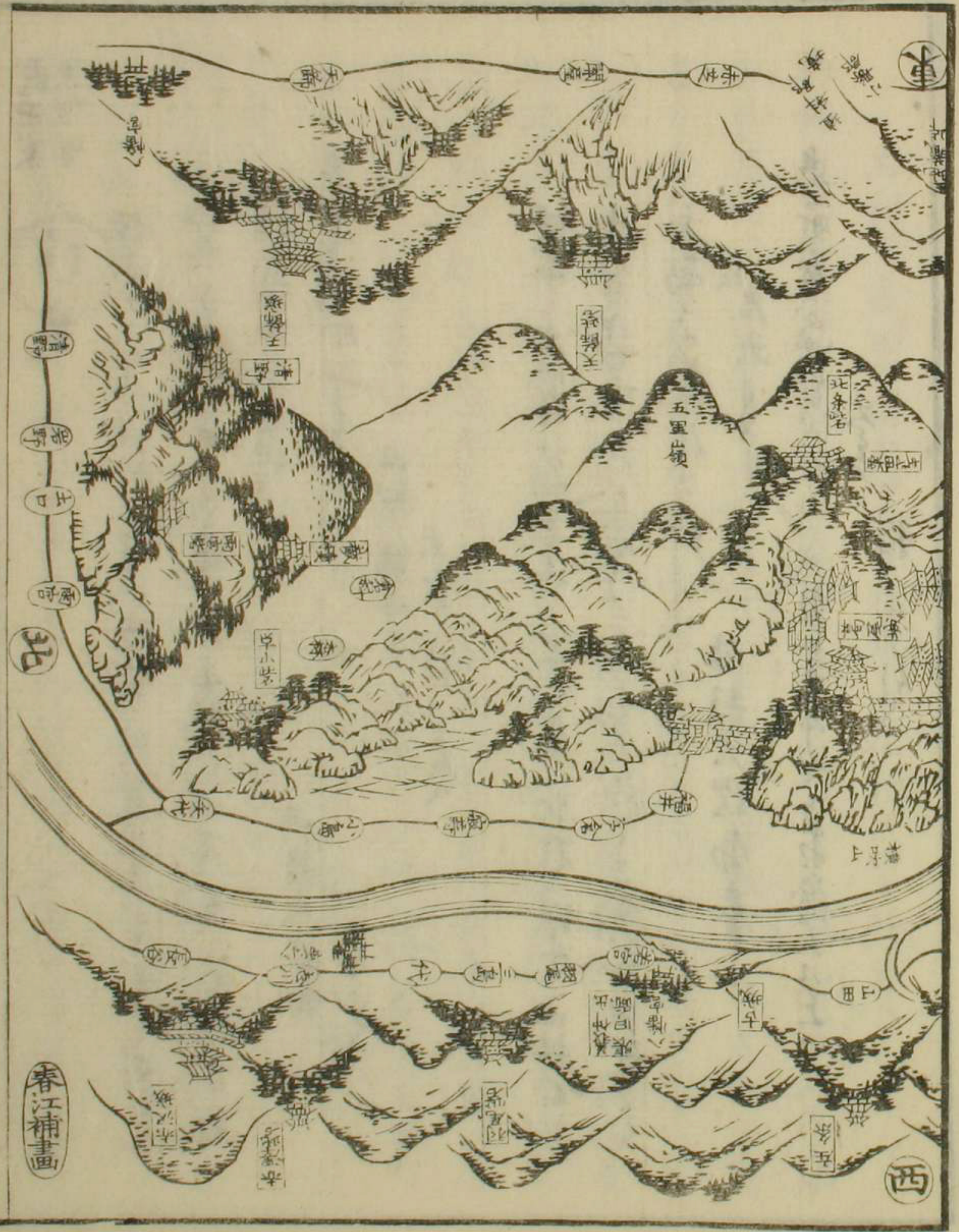
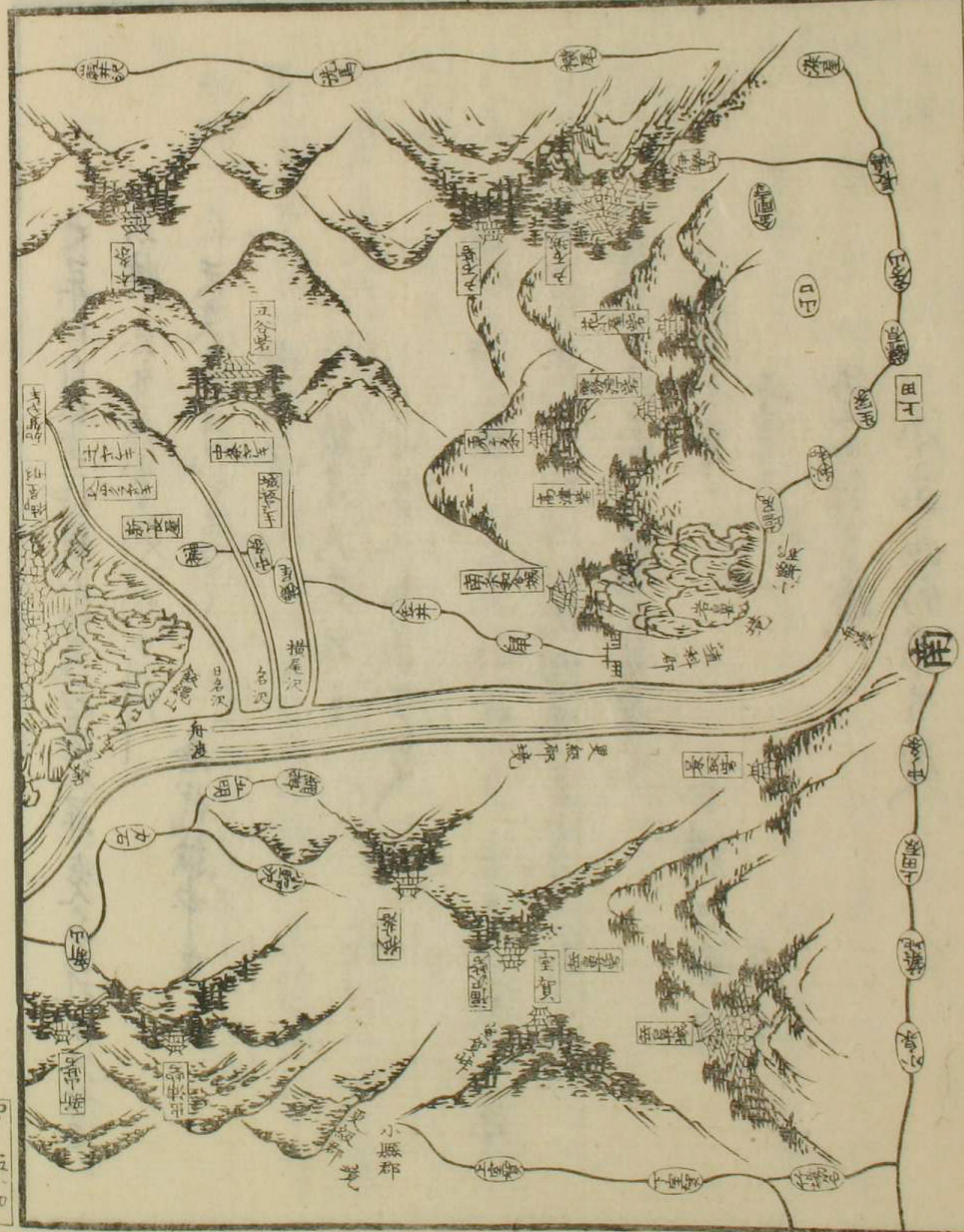
尚社に神職ありこの為侍従といふ 上意く社と上意
勿論に社に於て終別一圓相争志者ありあり
上意く社と上意く社領三百貫文

天文七年 出浦下野也

二月主 村上朱印

小宮山和泉守

村上家
本城
附城
諸砦
けり坂本の
竹鼻氏小
不は後をり
諸砦して
出之



武田家
朱印写

九段 定

坂本大工部社領事年以定作判累年以之有之亦自有本
山存也所由有也遠山早竟祭礼亦不有也傍之被
作出者也仍世件

乃於大炊師

天正七年己卯二月十七日

佐別坂市

大工部社之文

坂本大工部社領事遠く不わ整北於坂本之山科而自

冬買込百六十段は成りてふくを以て祭礼の旧規にて

お勤も亦仍世件

成 石九月廿日

九段

此於大炊師奉

此等町屋を以買込百六十段買込年にてお勤も以上

大工部

社之文

右村上武田の證文四通共焼失して記録にのみ残しりとぞ

柞神の城は地科郡北条安形庄葛尾直高神より十餘丁繩張天元二卯

年普請始り山城四百六十丁構當時一方は要害川中嶋表の追合口矢代小構へ

東方五里を岳西表は福井大寺に南當寺は方十隈川と受横吹の方山品

石嶋立屏風の如く葺溜松栢茂まり小縣郡境岩鼻小構此所倉地の
岡の跡あり 柞屋

形浦方北条日名小屋南方日名沢川京東方穀垣構西の方堀構並木を成亥

の方に柞神社立るは屋形南を諸士屋表は倉出厩は長屋山山の麓に唐

穿明神の社南日名北日名緒士家中屋表遠堀登城口鎌倉の山王宮町

家市場と建連わたり正暦四年癸巳迄十五ヶ年の間小治城被焼くは

是と軍李者流城取乃傳りて繁榮の地と中けたり

○村上山満泉寺 曹洞宗上州長樂寺に属し
岡山長樂寺二代勅特賜見尊禪寺 本尊石佛の釈迦如来内仏小弘法

作の辨才天は丈五寸護士の灰を以て彫之は背に弘法の法判有

當寺は永正年中村上顯国同基めて即村上山満泉寺と唱ふ為寺領



正四位左少将源義清
 天文十六年八月十日住州
 上田原に於て武田信玄
 と合戦の時敗軍味方に
 及忠の者もて本城小火と
 け敵勢を引入せし故
 我場より直小
 水内郡茅川の
 城へ引えまより
 越後小赤沢の
 城へ退きたり
 赤沢城は越後小
 岩舟郡村上より
 越後に五万石村
 敷五十八ヶ村城敷
 酒井彈正方り
 此時赤沢於理亮
 一人供奉あり

近郷中の条下村小於て六十貫文高附武田領と成て廿八貫文小成り其後
寺領廢ると又天正年中村上園清義清の弟海津安堵れ初廿五貫文寄附以下略之

○中門の額山 四辻大納言 ○本堂額大徳寺 街道田町左側小村上義清之墓

村上顯国の塚は所沢と ○同義清塚と云不抗建真の林の内小五輪塚あり

○同園清塚音内 ○村上持城。戸石。葛尾。深沢。觀音寺。桂山。天飾

○同附持高家胤。高梨摂津守政頼。井上左衛門尉政満。出浦對馬守

盛為。屋代安藝守義綱。室賀盛清入道一葉軒。清野道壽軒。須田

相摸守親頼 以上七家末孫の所旗本并小尾州家又上杉家真田家小

ふ在勤なり 右村上家の支と其所の者所持の抄あり

信府統記 埴科郡葛尾の城は在り村上義清と信濃源氏少く更科水内高井佐久

俱に五郡餘を従へ領を出園中れ大身なり其餘の郡も屬せし人を

を又五郡の中にも他家へ從ひける人も有く混ぜり其麾下に依り和田布下

樂岩寺 浅野 岩野 高坂 西条 平賀 相木 芦田 瀬馬 寺尾 綿内 屋代 雨宮 河田 大室
岩竹 小田切 余地 塩寄 笠原 平原 平尾 望月 下曾根 前山 内山 春日 山部

尾田井 塩川 安田 須田

○中の条村十四五町民家相對して巷をたせり此節麦苧田植の喫勇は

しく昇平の御代乃風俗甚耕時を遠くを民の産業のし開り

○鼠村 又鼠宿 五六丁お對して巷をたれ此邊塚にせる巖石は葛山天よ時ち

左に千曲川の急流矢れ如し即會地の園乃跡方なり此地名考ふ其後不詳

よりつろ猶尋ぬべし會地早雄神社と稱する宮あり 按會地早雄神社 国史ふ又あらん

閑院宮御祈願所とて其所少く一枚の摺物を得たりたよ鳴き

鼠大明神鎮座由来由會地の関乃記

水葛苧をたぬの國に今地乃言つるの東に我くころ岩山篠へ西に

を縁する松樹茂りそそ高き若き了出麓より子限の流を砥くと

漲りて小越へ落入ぬと地科文級小縣の三郡鼎のあやしく結ひりふ

地少て吾妻より越後小通へ順路一筋に続きゆくところなり

かしらぬと逢ふ地なれば今此の関とせりける往昔日本武尊

埴科郡鼠宿

鼠大明神

耕雲寺

岩鼻

千曲川 半過山

會地関の跡

志きれらや

かよふんち

つりたつらん

らゆき

あふち乃雲い

きしひ

知家



山岩鼻の嶮路に
芭蕉翁乃
句碑あり

岩鼻や

あふち

月の友

むらり

大々城



岩鼻城山

蔵城山

伊勢神明

水晶山

耕雲寺

岩鼻

貝足岩

會地尊雄神社

鼠宿村
新地村

クラカケ石

東夷征討の折々此地へ行暮る多し大伴の健日連公に
命じて木のりや柙根と刈たらしむ假小宮造りし
やう終ふおち月りくまらん東に嶺に巖石露ひ
はを祈るに及んと清河わさるる又御自ら清幣を立
て大己貴命を勧請し嵐大明神と崇め祀り終ふ是小依
嵐さる物をそこらこの山を鎮めそらうに蚕艱を守り給ふ
中裏熊野控所此今地ふ出況し給ふにより出速男神と申す
ふ故に會地早雄神社と稱し四座に神同殿ふ座に此今地の
関りてゆりしる名おたるより諸抄おし明らふまどりの代より
閑成郷とあり四方にけい名を記しんと持ふよに寛永
この年丙寅後のきさら寅社司源義利誌

文化二乙丑年再板

會地八景

- 山名眞の萼紅葉
- 會地螢
- 嵐の宮郭公
- 具足岩雪吹
- 和合楳月
- 山寺時雨
- 鞍掛石陽炎
- 千曲川花の浪

會地の宮神主 源義國

社内より方葉れ款と石に彫て建 天平勝宝七歳二月十六日

知波夜布留賀美乃美佐賀尔怒佐麻都里伊波負伊能知波
意毛知く我多米 主帳埴科神人 部子忍男

○竜田山耕雲寺

曹洞派上田属 伊勢山陽養寺

嵐宿の山上に有る信玄自筆の書と納む

國之中郭有僧呼曰乾巨有庵題無名矣於于人需予扁是云
耕雲證其旨曰

一重白矣一重紅鋤破招提西又東
別有閑田佳景在或時種月或時風

維時天文廿二年三月十七日

大膳大夫兼信濃守

源晴信花押

耕雲寺

定

卧竜 朱印

一向後祠堂涉利信徳改事

一 門前新造云々 在 家 三 万 口 次 々 山 寺 信 及 中

右 二 系 月 今 以 後 被 成 世 教 免 之 被 信 出 也 也 何 件

天 正 八 年 庚 辰

丙 子 十 九 日

安 部 加 賀 寺

在 云 々

料 考 云 々

○ 岩 鼻 和 合 の 塚 山 麓 西 へ 鳥 居 有 之 翔 之 づ け 嶮 岨 有 年 々 虧 墮

老 大 岩 若 む 十 間 十 五 間 位 或 二 三 三 三 石 の 岩 幾 許 と 云 云 救 志 云

を 落 重 り 又 山 を 下 せ 其 際 と 傳 へ 下 塩 尻 上 塩 尻 秋 和 等 乃

村 々 有 之 上 田 の 城 下 入 口 新 町 上 入 之 千 曲 川 橋 を

涉 中 の 条 加 富 小 島 干 梅 舞 田 八 本 沢 の 五 ヶ 村 と 越 て 別 所 村 の 七 久

里 温 泉 男 神 岳 女 神 岳 三 樂 四 院 等 とも 見 之 云 々

善 光 寺 道 名 所 圖 會 卷 之 四 終

